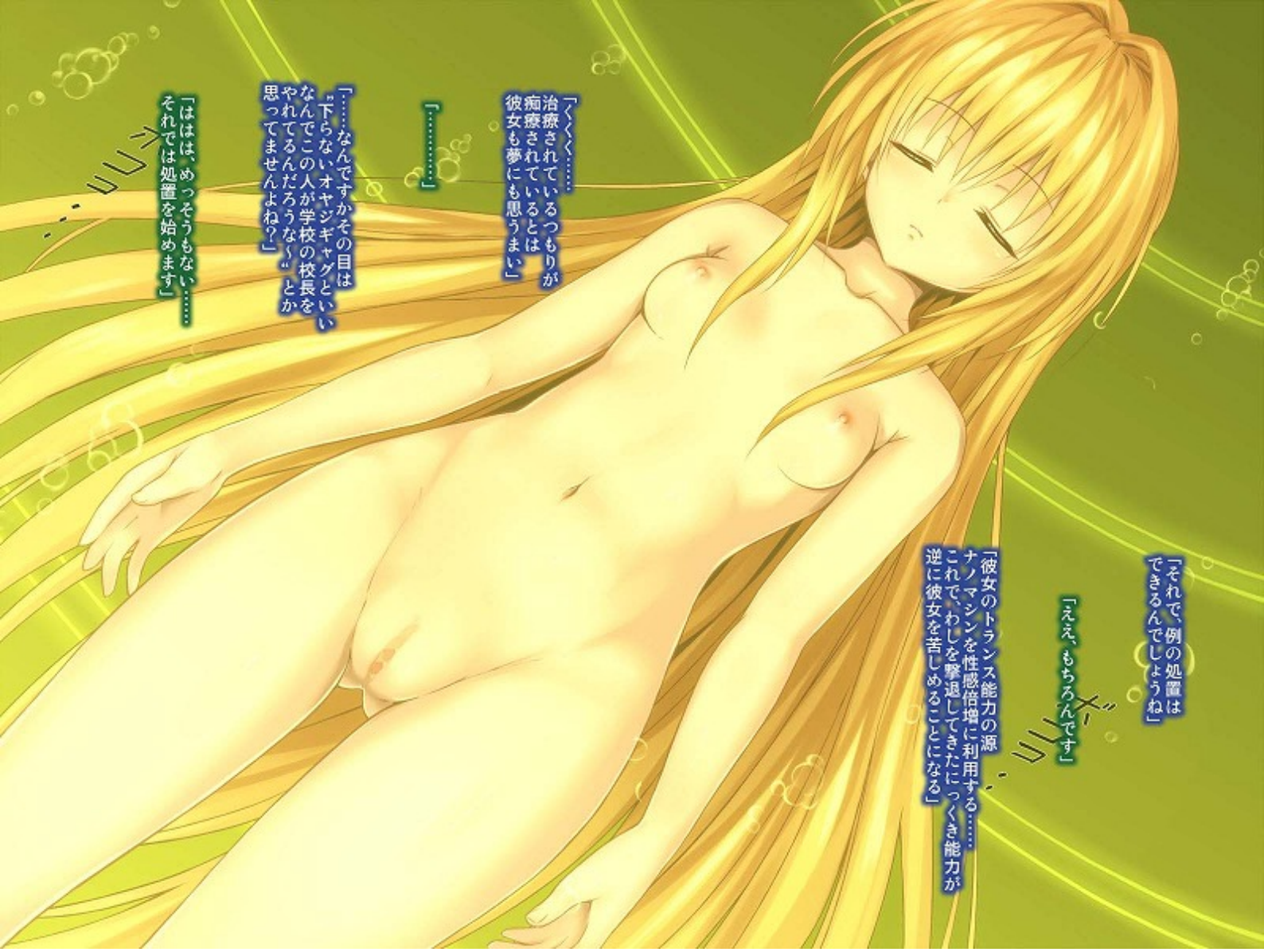
R18
えっちいこと……好きになっちゃいました♥
最初はムリヤリ
でもこの通り
こんな風にされちゃうお話
その1
a face 2011 presents

「うう……もう少し
手加減してくれても……」
「あなたのように
突然女性に抱きつこうとする変質者に
手加減など無用です
今日だけで何度も何度も……」
「それだけヤミちゃんのことを
好きだという証拠ですよ～」
ヒク
ヒク
「ヤミちゃんは"恋愛"がどういうものか
知りたいのでしょう？
これはわしなりの愛情表現なんですよ」
ゾゾゾ……
「き、気持ち悪いことを言わないでください！」
「ヤミちゅわ～ん!!」

「トランス！」
「うぼぁっ!!」
「えっちぃのはキライです」
「うう……でも一瞬白いモノが……
服が黒いとチラリと見える
印象も鮮烈になりますなぁ
これだけでわしは……」
「……」
ボカッ！ドカッ!!
「痛い！痛い！
倒れている相手を殴るのは良くない！」

ヨロッ……
「え……!?
あ……、これ……!?」
（トランスの使いすぎ？
こんなときに……）
「ぐふふ、どうしたのかな～？
ヤミちゃん？」
「い…いいかげんにしないと
本当に殺しますよ!?」
ヒク
ヒク
ニコッ
「そんなこと言ってるわりには
顔色が悪いですねぇ
早く逃げないと捕まえちゃいますよ～」
「くっ……」
（くくく……
今は見逃してあげますよヤミちゃん
こちらもトランスでボコボコにされて
余裕が無いですからねぇ……）

ボ…ぶくぶく
「もう入ってこられても大丈夫ですよ校長」
「うむ」
ボン
「ドクターミカドでなければ治療は受けないとずいぶんダダをこねられましたが……」
「いないものはどうしようもないですからねぇそのために彼女を旅行に行かせ闇医者である君を待機させておいたのですから」


「それで、例の処置はできるんでしょうね」
「ええ、もちろんです」
「彼女のトランス能力の源ナノマシンを性感倍増に利用する……これで、わしを撃退してきたにっくき能力が逆に彼女を苦しめることになる」
「くくく……治療されているつもりが痴療されているとは彼女も夢にも思うまい」
「……」
「……なんですかその目は“下らないオヤジギャグといいなんでこの人が学校の校長をやれてるんだろうな～”とか思ってませんよね？」
「ははは、めっそうもない……それでは処置を始めます」

「処置は全身に行いますが特に感度を上げたい場所はさらなる処置を行います」
「衣服に身体がこすれただけで相当の快感を覚えるようになるでしょう」
シュルルル
「こうしてじっくりとヤミちゃんのおっぱいが揉まれているのを見ると良いものが見られて嬉しい反面獲物を横取りされているような悔しさもわき上がってきますなぁはぁはぁ……ちょっとキミその操作わしがやっちゃダメかね？」
「ちょっ、校長!?勝手にコンソールに触らないでくださいデリケートな作業ですからここは抑えて」
「しょぼん……」

「次は膣に処置を行います
処女にもかかわらず
いわばセックスに慣れた女のように
膣奥のポルチオで絶頂できるような
身体になるでしょう」
「とはいえ、いくら感度の良い
身体に改造できたとしても……」
「みなまで言わなくてもいいですよ
この処置は今までわしを苦しめてきた
トランス能力への意趣返しのようなもの」
「与えられる快感が
誰からどのようにもたらされるのか」
「彼女を精神的に屈服させるのは
あくまでわしの性技と裁量に
よってでなくては」
シュルルル
ズズズ…
ビチ
バイ
バチ

「効果が出始める明日に備え
今日はわしも回復に努めましょう」
「う……ん……」
「くくく……
どんな夢を見ているんでしょうねぇ
では以降の処置を頼みますよ
成功の暁にはこの町での
不自由のない暮らしを約束しましょう」
「ありがとうございます」

翌日――
「やはりドクターミカド以外に治療を任せたのが間違いでした……」
（でもトランスを使いすぎたときのような目眩はない）
（熱っぽいけど意識ははっきりしてるでも身体を動かしたときに起こるこの痺れは……？）
（背筋がぞわぞわして思わず身をよじってしまう）
ビクッ
ギュッ
（でもそうすると服にこすれた部分からさらに痺れるような感覚が走って……胸などは痛いくらいに張ってる）
「治療の失敗……とは違う……？」

ドンッ!!
「ひうっ……!?」
(何が起こったの!?
胸?　掴まれてる?
でも今、腰から背筋を
電気が走ったみたいに……)
「うわわわっ……!
ごごめんヤミ!」
「ご、ごめん、今すぐ離れるよ!」
「結城リト……
あたなという人は……
いよいよ死にたいようですね?」

「ちょっ……モゾモゾしないでください！
は……あぁぁ……っ！」
（な、なにこれ……
彼の指が動くたび……
腕を引き抜こうと脇を擦るたびに
身体の内側が波打つみたいな感覚が……）
「だ、大丈夫か？
今日学校休んでたろ？
体調悪いんだったらミカド先生の
ところまで連れそって……」
「そ、そうやってまた私に
えっちぃことをする気ですか？
話す前に離れてください」
キニヤ♥
キニヤ
「わ、わざとじゃないって!!
悪かったよ
じゃあ無理するなよ……」
「無理などしていません！」

（結城リトを頼ってもよかったはずなのに強情を張ってしまった……）
（彼には以前にも胸を触られたことがありましたが、こんな風にはならかったその違いを知られたくなくて……なんで……？）
（ああ……思考が定まらない）
（くっ……下着も濡れているみたいもしかすると漏らしてしまって……脚を伝ったしずくがブーツへと流れていて気持ち悪い……）
（それにこれなんだかヌルヌルしているような……）
（とにかくもう一度診療所へ……ドクターミカド……今日はいてくれると良いのですが）

「くっ……ドクターミカド……何で……いないの……」
（あぁもう……凄い濡れちゃってる……なんでこんなにビショビショなの？）
はぁ…はぁ…
（それにやっぱりヌルヌルしてて……おしっこじゃないなら……もしかして……愛液？）
（確か女性が性的に興奮すると……ち、違う！私、そんなえっちぃこと……）
（でもだとすると、先ほどから感じているこの痺れのようなものは……）

「これ……すごい……キモチ……イイ……はぁ……」
（だ、めぇ……こんなの……すぐに止めないと……でも、指とまんない……）
「もっと、指動かしたくなって……くぅ……ん……はぁ……ッ」
「ひうッ……！」
（す……ごい……アソコから波が広がってぇ……）
「この感覚が、快感……これが、えっちぃこと……」

ビクン
はぁっ
グイッ
「ひ、はぁぁぁぁッ……ッッ!?」
「まさかヤミちゃんのオナニーが見られるとは……これは服など着てる場合ではありますまい」
「校長……!? なんでここに……」
（これ……目の前の、お、男の人の……）
ガバッ
ギャー
「離れてくだ……ひんッ！や、引っ張っちゃ……!!」
「わしが近づいてきたことにすら気づけないとは……くくく、パンツもこんなに濡らして……」
「くっ、トランス……！」
（……なんで!? トランスできない!?）

「言ってくれればいつでも手伝いますよ～どうです？　こんな触り方は」
「ふぁぁあぁぁッ……！」
「ワレメに沿って指を動かすたびにクチュクチュとエッチな音がしますねぇ」
（なに、これぇ……自分で触っていたときと全然違う……）
「お返しにわしのチンポも舐めてくれませんか？」
「お断りします……！」
（でもこれ凄く良い匂いがする……な、なんで……）

「ホントは舐めたくてたまらないんでしょう？」
「うう……」
（この口ぶり……もしかして私の身体の異変も……ああ、でも……そんな触り方ぁ……）
「舐めてくれますよね」
（ここで言うとおりにしちゃ……ひうっ……！！ダメ、敏感なトコ触っちゃだめぇ……）
「舐めてくれますよね」
「わ、分かりました……だ、だから、もう触るの……止め……ひううッ!!」

（了承したものの……
なんとかスキを見つけて
逃げ出さないと……）
シコッ
「早く、早く～」
シコッ
「くっ……」
（これが男の人の……
ドクドク脈打ってて
それになんだか
凄くえっちぃカタチ……）
「ん……」
（こんなの嫌なのに……
でもこの臭いをかいでいると
無性に身体が熱く……なって……）
クチュ……

「ん……クチュ……チュ……」
（これ……おかしい……舐めてるだけで私まで気持ち良くなってる……？）
「気に入ってもらえたみたいですねぇはぁ……ヤミちゃんの小さいペロがわしのチンポをぺろぺろと……」
「チュプ……クチュ……チュ……」
「これは……くっ……視覚的に興奮しますねぇ」
（うそ、まだ大きくなるの……？）

「やッ!?　さっき触らないと……」
「そんな約束しましたかね～」
チュパ
レロ
ピチャ
ビクン
はむ
ん…
「やめ……チュパ……そんなの、頭ヘンになる……んく……だめ……いじっちゃ……や……！」
「否定してもココからはどんどんオツユが出てくるじゃないですかもっと触ってほしいのでしょう？ほらっ……ほらっ……」
「ひう……ひん！……はっ……はひ……！」
（なにこれ……さ、触られるたびに目の前がチカチカって……）
ニュッ
クチュ

「ほらほら直接触っちゃいますよ～」
「ひうっ……ダメッ！そこ、直接、ダメェッ……！」
レロ
ジュボ
ジュッ
ブ～
「思った通りのツルツルマンコそれをこんなに濡らして……ヤミちゃんはえっちぃなぁ～」
「ちが……私……はひんっ！」
「さっきからヒクヒクして……もうすぐイッちゃいそうなんじゃないですか？」
（イク？……な、なんのこと？）
「なに……言って……クチュ……ひあぁッ……ん……くぅ……触っちゃ……らめぇ……ッ!!」
ヌル…
グチュ
クチュッ
ビクッ

「ほ～ら、ピンカンお豆をぎゅ～……っと」
ビクビクウッ
「ヒグゥッ――ッッッ！」
（な――なに……これぇ……）
ビクッ
ビュクッ
ビュルル
ビュク
ビュク
「はぁ……はぁ……ひ、ひぃん……」
「くくく……ハデにイキましたねぇ……わしも興奮して思わず出しちゃいましたよ」
「イ……イク……？……今の……が？」
「……」
「そうそう、性的絶頂〝アクメ〟、オルガスム言い方は何でもいいですが……ん？」
「失神してしまいましたか……まあ、性感増幅されてそのうえ初めてですしねぇじゃあ、続きはウチに帰ってからにしましょうか」
ぎゅ…
ビュク
ビュク

トロー！
「ん……」
〔な……に……？
お尻に何かヌルヌルしたものが……〕

「な……ここは……？」
「おはようございますヤミちゃん」
「キャッ……！」
「いまさら身体を隠しても遅いですよ
さっきまでじっくり鑑賞してましたし」
トロ――
ビクッ
ビクッ
「く……ではそのヌルヌルをかけるのを
止めて……く……ください……ひんっ」
「くふふ……ローションのしずくが
体表を伝うだけでも
気持ち良いんでしょう？
これからもっと良くしてあげますからね」
「ひ、人の話を……」

「ひあぁっ……!!」
「えっちぃことが好きなヤミちゃんはヌルヌルのこともほんとは好きなんですよねぇ」
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「こうしてわしの全身でもってヤミちゃんを気持ち良くしてあげますよローションプレイの醍醐味です」
ぬるるるる…
ヌチャ
ヌチャ
ヌチャ
「や、誰もそんなこと頼んで……ない……」
(これ……ヌルヌル……すごい……ッ！体中さわられているみたい……こんなの気持ち悪いはずなのに……)
やめ…
はぅ
ムフ…
ネバァ
ヌルン
ヌチャ
「や……くぅ……なにか……お尻に当たって……る……くひッ……！」
「チンポですよ思い出してくださいさっきぺろぺろしてたものあれがヤミちゃんの中に入りたがってるんですよ」
「――ッ!?やめ……この……くッ……！」

「抵抗しても無駄無駄」
「くひぃっ……！
む、むね……
いじらないでぇ……」
「トランスも使えず
この体格差で押さえ込まれて
おまけに全身ビンカン状態……
もう諦めてチンポ
受け入れちゃいましょうよ」
「いや……です……
やめ……ぐりぐり
擦りつけないでぇ……」
「チンポのカリでクリトリス擦られて
気持ち良いでしょ
もっと強く擦りつけちゃいますよ」
「や……く……はぁ……
も、おちんちんやぁ……んあっ……！」
ズルン
ズルン
ズリュ
ぐにゅっ
ぐにゅっ
ちゃぷ
ちゃぷ
ギシ
ギシ
ぴんっ
ぞくっ
ぞくっ
ヤッ
まあッ
もにゅ
もにゅ
あッ

「乳首もクリもこんなに勃起させてほらっ、ほらっ」
「くひぃぃ――――んッッッ!!」
「……かはっ……はぁはぁ……ん……はぁ……」
「イっちゃいましたねぇ小さい身体をピクピクさせてでもこれからが本番ですよ」
「ら、らめぇ……」
ビクン
ビクッ
ビクン
ビクン
ビクン

ズロロロ
ばた
「や……そんなの……入らな……」
「ほらほら、暴れないで」
（だめ……逃げようにも力が入らないそれに腰持ち上げられて……）
「最初ちょっと痛いかもしれませんがすぐに気持ち良くなりますからね～」
「気持ち良くなんか……なりたく……あっ……また……だめ、擦りつけないでぇあぁんッ……！」
「ちょっとクリを擦っただけなのに大人しくなっちゃってじゃあ、そろそろヤミちゃんの初めてもらってあげますからね～……ふ……んっ」
「やめッ……ッ」
ヤ
くぅ
ぶるん

「かっ……はっ……は……ふ……」
「うう……なんて凄い締め付け……ローションのおかげでもっとスムーズに入ると思いましたが……」
（お、大きいぃぃ……裂ける……！）
「わしのモノを追い出そうとしてくるようで……くく……征服欲をかきたてられますなぁふぅ――うんッ！」
「ひうッ――ッ！」
（うそ、まだ入ってくる……？）
「見えますか？オマンコから初めての証が垂れてますよ……って、そんな余裕は無さそうですねそらっ、もうひと押し……」
「んあぁぁぁぁッ――ッ！」
ズブッ
ズブッ
ズブッ

「ここがヤミちゃんの一番奥ですかまだチンポが全部入りきってませんがこれからほぐしていきましょうね」
「か、勝手な……ふー……くっ……こと…を……は……はふ……」
「ちょっと落ちつくまでクリとか胸で気持ち良くしてあげますよ」
「ひあああぁ――――ッ！」
（痛いのに……気持ちイイ!?勝手にアソコが締まって嫌でもアレが入ってるのが分かる……）
「くっ……ん……ぐう……」
「あれ？　どうしたんですヤミちゃん声我慢してるんですか？」
ふっくっ
ぐぎぎ
ぷる
ぷる
ぷる

「もっと可愛い声聞きたいなぁ チンポグリグリグリ～」
「ふ……おおお おおあぁぁッ……!?」
「そういうお腹の底から出るような 下品な声もいいですねぇ」
「お、おなか……なか…… かき回され……」
「もっとしてほしんですか? グリグリグリ……」
「ちが はぁぁあぁぁッ……!」
「こうして腰を回すと たまらないでしょう?」
（これだめ…… ヌルヌルのせいで密着感が凄くて…… 混ざっちゃう…… アソコがおちんちんと一つになっちゃう）
ビグン
ビクン
ビク

「ほら、もう本格的にピストンしちゃってますよさっきまで処女だったマンコにじゅぶじゅぶ入っちゃってる」
ぱじゅっ
ぱじゅん
ぱじゅん
ぱじゅん
ジュプ
ジュプ
ジュプ
ジュプ
ガク
ガク
ガク
ガク
ビク
ビク
ビク
ビク
ビッ
ビッ
ビッ

「くおおおおおおおおッッ――――ッ！」
「あああああぁぁぁ――ッ！」
（な、膣内ではじけてるぅぅぅッ……なに……これぇ……頭……真っ白に……）
「おおお……ヤミちゃんもイッてるのが分かりますよわしのヌルヌルを吸い出すようです」
「ぁぁあッ……あッ……ひぐ……は……」
「……ふぅぅ……こんなに出したのは久しぶりですよやはりこれも愛故ですかね……」
「あ……は……か……はひっ……」
「しかし……」
「はへ……!?」
ビュルルルル
ビクン
ビクン
おおおおおおおおお

「わしのチンポはまだ満足してないようなんですよ」
「ひあぁぁぁぁッ――――ッッ!?」
「くくく……挿入れたままで体位を変えるのは刺激が強すぎましたか？今度はヤミちゃんが動いて欲しいんですが……」
「か……はひ……」
!?
「そんな余裕は無さそうですねぇでは……ふっ」
「はぁぁあぁぁ――！こ、これ……深ッ……！そんな……入らな……」
「大丈夫ですよもうかなりほぐれてきてますから全部入るはず……です……よッ！」

「ふごおおおぉ――――ッッ！」
「うはは、膣内に入ってた精液が吹き出て凄い音がしましたねぇ“ブピビッ”ですって」
「らめ……ごんなの……ご、ごわれぢゃう……」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクン
ビクッ
ズボッ
ズボッ
ビュッ
ビュビュッ
「でもさっき射精してから子宮口がずっとチンポに吸い付きっぱなしですよ？精液ほしがりの淫乱マンコ」
「そんなの……うそ……」
「遠慮しなくていいですよヤミちゃんのためなら何度でも出せますから」
「や……そんな……いらな……」

「ふうっ……くうぅ……はぁ……」
（これぇ……さっきより深いぃ……
突き上げられるたび
頭のてっぺんまでずんずんくるぅ……）
「脚がガクガクですねぇ
チンポ根本まで入れられて
膣奥突かれるの
そんなに気持ちいいんですか」
「わ、わかんらい……
かってに……
ビクビクッ……て……」
「ほら、ここですよ」
「ふううッッ……！
そんなに、突いちゃらめぇ……！」
「初めてでポルチオの
良さを味わえるなんて
ヤミちゃんは幸せ者ですよ」
「ううう……こんなの……！
こんなのぉ……！」
ガクン
ガクッ
あッ
ひッ
ひあッ
ガクン
ガクン
ガクン

「クリもビンビンでズルムケて触って欲しくて仕方ないって感じですね」
「ソコらめぇ……ッ!!あ……は……くぅぅ……ッ!」
「クリを触るたびにマンコ締めてチンポを感じてまた締めてヤミちゃんのイキっぱなしマンコ最高に具合がいいですよ」
はぁッ
「やらぁ……も……気持ち良いの……や……」
「でもさっき注いだ精液が溢れちゃってますねぇそろそろ新しく注いであげますよ」
「くッ……ひッ……はひッ……はぁッ……!」
(また腰の動きが激しく……なってああぁ……またくるぅ……また出されるぅ……)
ドチュッ
ジュプッ
ジュプッ
ぷるん
ぷるん
ぐちゅ
ぐちゅ

「らめぇえええええッ！」
（またぁ……膣内で出てるぅ……溜まってくの……わかるぅ……）
「奥の奥に出してあげますからね」
「も、出さないでぇ……ううう……」
「おお……出るわ出るわこのままチンポで栓したままだと孕んじゃうかもしれませんねぇ」
（はらむ……？）
「お腹の膨らんだヤミちゃんとするのも一興ですがはてさて……」
「や……そんなの……！」
ビクン
ビクン
ドプドプ
ドピュ
ドピュ
ドピュ

「慌ててチンポ抜こうとするヤミちゃんも可愛いですねぇ生まれたての子鹿みたいにプルプル震えちゃって」
「ううう……」
「それにしても次から次へと垂れてきますね我ながらよく出したものです」
「今日はこの辺でおしまいにしますが早く慣れた方が楽しいですよ……ふひひ」
（はやく……かきださないと……でも、もう体……動かな……）
ぶるっ
ぶるぶる
ぶる
ぶる

（この部屋にも……無い……）
（ドクターミカドがどれくらいで帰ってくるか分からない以上この身体の異常を治す手がかり……）
（薬やカルテのようなものでも見つけてから脱出したいのだけど……）
「こんなところにいたんですか」
「クッ……！」
「おっと……逃げても無駄ですよこの屋敷の出入り口はわしでなければ開きませんから」
「……」
ぐふふ…

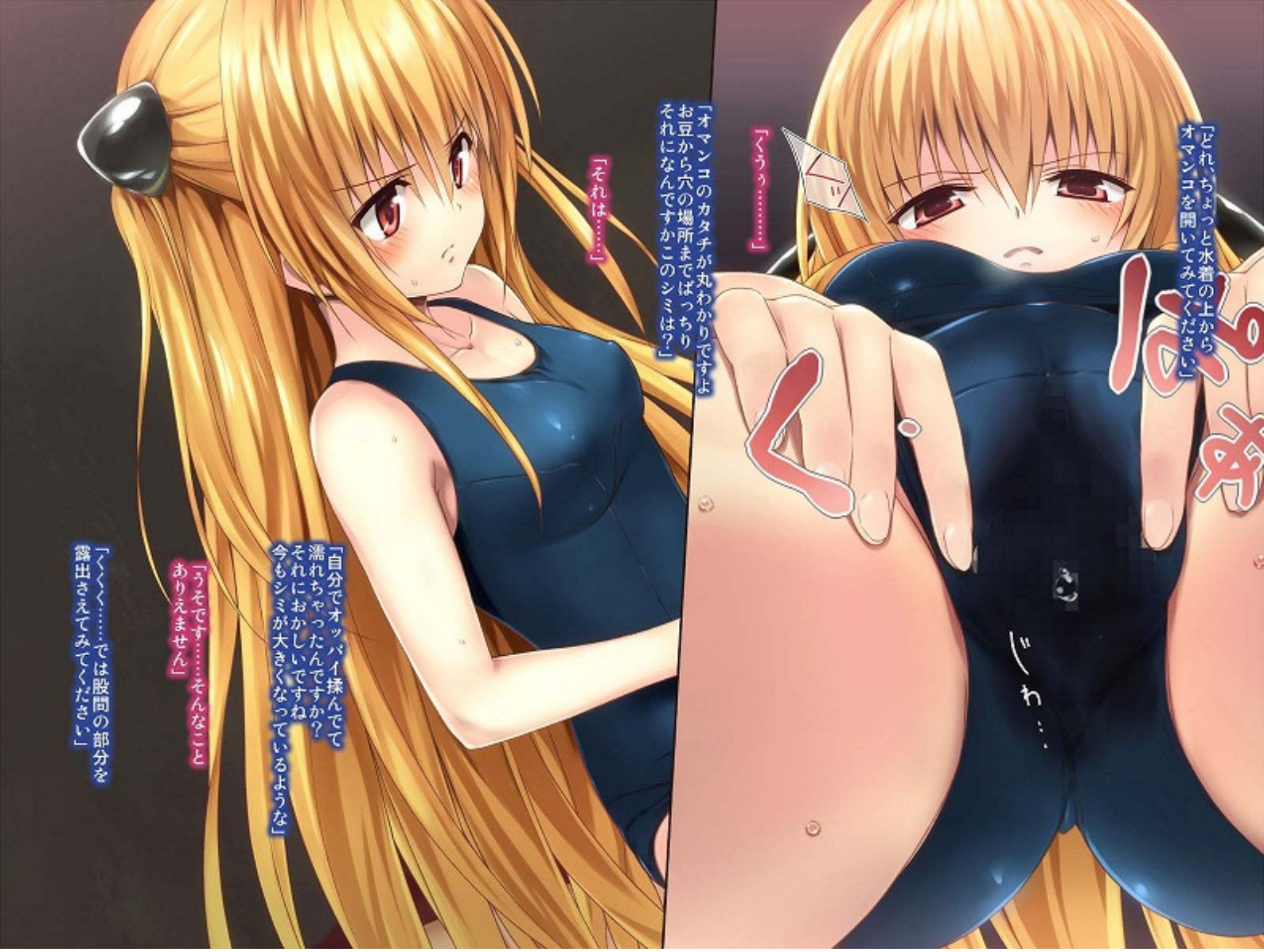
「ベッドルームからいなくなっていて驚きましたよ
昨日の今日でたいしたものですところで、お探しのものはコレでしょう？」
「――ッ？」
「ヤミちゃんの身体を治すお薬ですよ」
「それを渡しなさい」
「お仕置きトランスが使えなくても体術でわしをボコボコにすれば薬も奪えてここから脱出もできる、と」
「……」
「しかし……」
「――ッ？　なにを!?」

「これ、カラッポなんですよ
ちなみにわしが飲んだんですがね」
「どういうことですか……」
「昨日に比べて身体の調子が戻っているのヤミちゃん気付いてますか？」
なし
「……」
「それね、膣内射精されたからなんですよ
別に精飲でもいいんですが……」
「これはわしの精液を
回復薬にする薬だったんですよ
他の方法はありません
施術の情報も全て処分済み
この意味お分かりですよね」
「わ、私にあなたの性欲処理をしろ……と？」
「なに、一週間ほどですよ
完治すればトランスも使えるようになります」

「くっ……
すべて計画通り……ですか」
「ここまでは、ですがね」
「そうそう、言い忘れていましたが
ちゃんと性的興奮を経て出した精液でないと
回復作用はありませんから
無理矢理出させても……
いやそれはそれで興奮しますが……」
「各種衣装やえっちぃ小説もありますから
いろいろと趣向を凝らしてくださいね」
「身体が元に戻ったら……
覚悟しておいてください」
「くくく……、一週間後に
どうなっているか楽しみですねぇ」

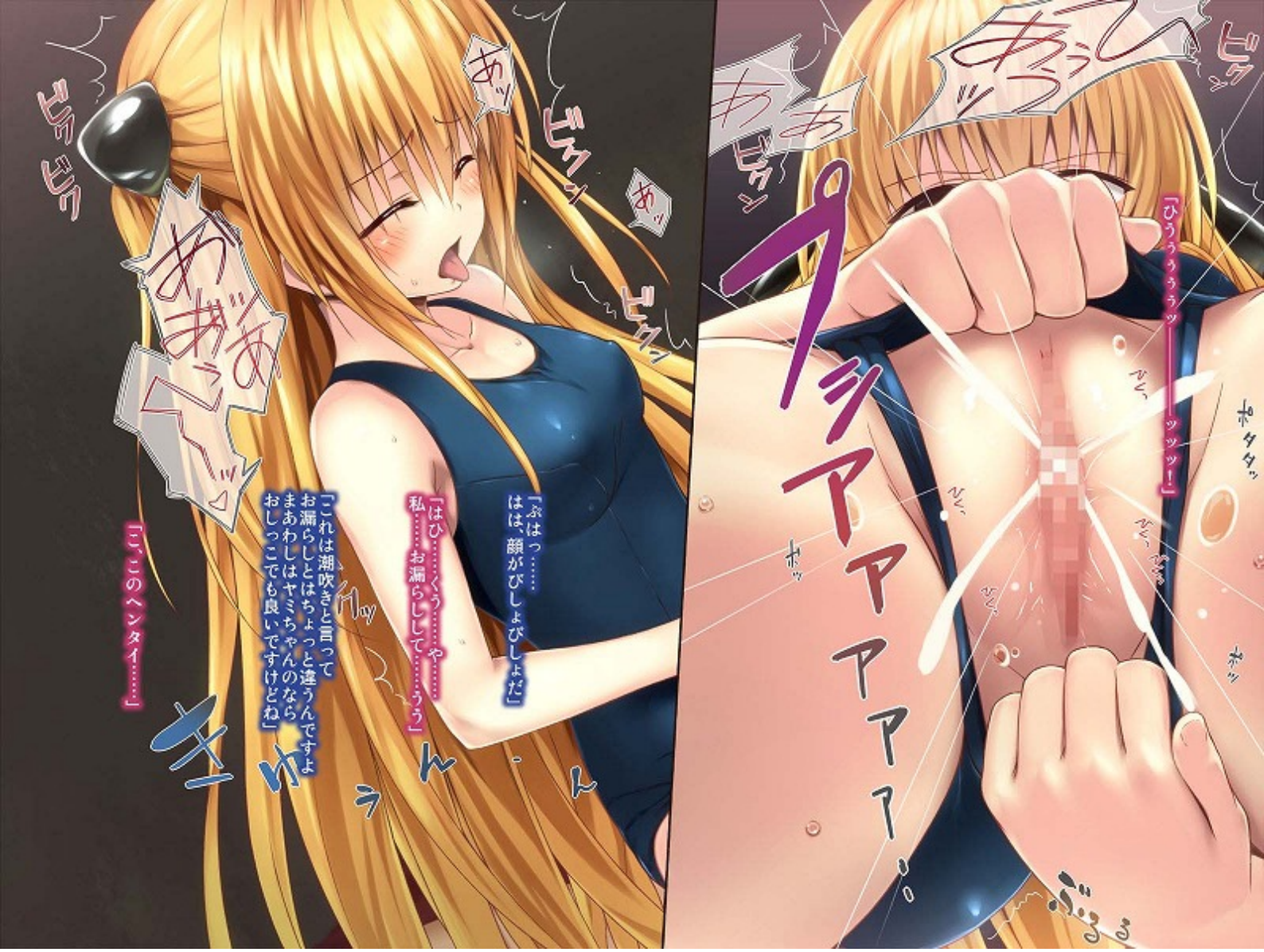
2日目――
「まずはスク水ですか
身体のシルエットを強調する紺色と
スカートを思わせる下腹部の構造
良いですねぇ」
「あなたの用意した小説によると
これで男性は興奮すると……
さあ、はやく射精してください」
「そんなのでは
勃起もしませんよ……」
「くっ……
ではどうすればいいんです」
「男をその気にさせるには
女の子の方もえっちい気分にならないと
ヤミちゃんが読んだという小説の通りに
してみてください」
「そんなこと……」
「さあ思いだして」
さわ
なでり

「〝ナミはとまどいながらも
自らの双眸に手をのばす……
薄い胸の肉を通して伝わる鼓動は
彼女が確かに興奮していることを……〟」
「お、それは『スク水女学生ナミ
～淫欲の対抗試合～』の一説ですね
その調子です
ちっちゃい胸を包みこむように周囲から……」
「わ、私だってトランスを使えば……」
「気にすることありませんよ
小さい胸が好きな男もいますから
このわしのように」
「あ、あなたに好かれても
嬉しくありません」
もにゅ
ムッ
ムッ
ムッ
ぶにゅ
ぎしぎし
――もにゅ……もにゅ……
「だんだん興奮してきましたか？
フトモモを通じて
ヤミちゃんの熱が伝わってきますよ」
「くっ……ふぅ……んんッ……はぁ……」


「どれ、ちょっと水着の上からオマンコを開いてみてください」
「くうぅ……」
「オマンコのカタチが丸わかりですよお豆から穴の場所までばっちりそれになんですかこのシミは？」
「それは……」
「自分でオッパイ揉んでて濡れちゃったんですか？それにおかしいですね今もシミが大きくなっているような」
「うそです……そんなことありえません」
「くくく……では股間の部分を露出さえてみてください」

ゲ
「やはり濡れてますねぇ
クリトリスも勃起してきて
皮から頭がちょっと出てますよ」
「小陰唇も綺麗なピンク色で……
まるでまだ汚れを知らない
乙女のような慎ましさです」
ふる
ふる
ふる
ヤバ
「そ、そのえっちぃ解説止めてください」
「何を言うんですか
素直じゃないヤミちゃんに
自分の身体がどうなっているのか
善意で教えてあげているというのに」
「そんなの要りません
それに濡れているとしても
それは性感増幅のせいで
私の意思では……ひゃっ！
アソコに息を吹きかけないで……！」
「アソコじゃなくてオマンコですよ
えっちぃ小説では
そう言っていませんでしたか？
男は言葉でも興奮するんですから」

「ぺろ～ん」
「ひうッ……や、……ヌルヌル……」
「ヌルヌルを出してるのはヤミちゃんですよ
ほら……ちゅば……こんなに……じゅるる」
「やあ……そんなトコ……」
「〝オマンコ〟ですよ……
ホラ……じゅるる」
「お、おま……オマンコ……！
そんなに舐めないでください！」
「よく言えました
ご褒美にもっと気持ちよく
してあげますね」
「や……も、なめちゃだめえ……
いや……なんかキます……
出ちゃうぅぅ……」


ビクン
あっ
ビクン
ビクビク
あぁぁ
「ぷはっ……
はは、顔がびしょびしょだ」
「はひ……くぅ……や……
私……お漏らししてぇ……う」
「これは潮吹きと言って
お漏らしとはちょっと違うんですよ
まあわしはヤミちゃんのなら
おしっこでも良いですけどね」
「ど、どこのヘンタイ……」
ビクン
ビクン
「ひぅぅぅぅッ――ッッッッー」
ポタタッ
ボッ

「イッちゃって脱力してるのも可愛いですが、いいんですか？最初の目的を忘れて」
「も……目的？」
「ほらほら、目の前にあるでしょう」
「あ……」
（凄い……大きくなってるさっきまではフニャっとしてたのに……）
「ヤミちゃんが勃起させたんですよ」
ビィ～ン
「私が……」
（私のえっちぃところを見たから……）
「ヤミちゃんがもっとえっちくなれば興奮して精液だってもっとたくさん出ますよ、きっと」
は――
待――
（もっとえっちになれば……）

（別に口車に乗せられるつもりはないですが）
「ん……ぺろ……くちゅ……ちゅば」
（それで早く射精させられて身体が元に戻るというなら……）
「お、なんか積極的になってきましたね」
「別にアナタに奉仕するためにこんなことをするワケではありませんから」
（何か出てきた……精液……じゃない確か、カウパー氏腺液……）
「先走り汁にもごく少量ですが精液が含まれているそうですからね綺麗に舐め取った方が良いですよ」
「ん……ちゅちゅ……じゅるる…るろ」
んっ
ぺろ
レロ
チュ
ぎゅ
ぎゅん
ぎゅん

（カウパー……美味しい……異常を回復するために身体が……求めてるのかも……）
「ちゅ…くちゅ……んく……ちゅば……」
「素直で良いですねぇ私もご褒美をあげたくなってしまいますね」
「ひあッ……！ちょっ……やめ……！集中できな……はぁあ……」
「くすくす……もっと激しく舌を使わないと精液は出ませんよ」
「んーっ！……ちゅッ……くちゅるろ…ちゅば……れろろ……んちゅ……」
「くぉ……そうです手でもしごいて……」
あっ
あっ
ちゅ
やっ
あッ
あッ
くちゅ
くちゅ
クリュ
クリュ
びくッ
びくんッ
びく

「んんんんッッ――――ッ!?」
（なにこれ!?
オマンコのあたりが
全部気持ち良くなってる!?
な、何されて……!?）
ペロ
クチュ
レロレロ
「んハッ……ん…じゅぱ……んんッ！
んー！……！　うう……じゅッ……」
（そんなに舌でほじらないでぇッ
オシリも……汚いのに……
なんでこんなに気持ちイイの……）
「もうイっちゃいそうですか？
わしもそろそろですよ
一緒にイきましょう……ねっ」
「舌の動きがおろそかになってますよ
まあ、クリとGスポットとアヌスを
同時に責められれば
そうなるのもわかりますが」
ジュルル
チュプ
ビクンっ

「ふあぁぁぁ――ッッ！」
「くうッ……ヤミちゃん、クチ開けて、クチ」
「うぶ……んんん……ぷは……んぐ」
「そうそう、ちゃんと飲まないと」
「顔に飛び散ったのも手で集めて飲み干すんですよ」
「は、はい……ん……ぺろ……んくちゅ……」
（あぁ……すごい精液が……身体に染みこんでくみたい……）

4日目
「やっ……離れてください！
するならクチで……」
「くくく……
さっきまでの威勢はどうしました
その格好に似合いの
セリフを言っていたではないですか」
「あれはアナタを
興奮させるための演技です
挿入を許すわけでは……」
「そのワリには
こんなに濡れ濡れにして
婦警さんも興奮してたんでしょ」
「ちが……
やっ……挿入れるのは……
チンポ……擦りつけないで……」
「まあまあ
オマンコの方がたくさん精液出ますから
ね、ね」
「そういう問題では……」
（またこの人のペースに
乗せられて……
このままじゃ今日も
膣内に出されてしまう）
ブル
ブル
くっ
やめ
グッグッ
ビクビク
トロー

「や……は、入って……」
「見ないのは逆効果ですよ
こうやってゆっくり入れられると
チンポのカタチが
ハッキリ分かるでしょう？」
「ん……ぐ……ふ……はぁ……」
「この辺は何て
言うんでしたっけ？」
「そ、そこは
Gスポッ……ト……
オマンコの
敏感ポイント……です」
「そうそう、ヤミちゃんの
気持ち良いところを
ゆっくり……ゆっくりと……」
（こんな……
一度もピストンしてないのに
もう……）
「か、身体さえまともなら……」
「くくく……
そうやって逃げようとするのも
わしを興奮させるための
プレイなんですよね」
ぞくぞく
ぞくぞく
ぞくぞく

「そうだ、その格好に似合いのアイテムがあるじゃないですか」
「……!?これ、手錠……!?」
「手錠をかけたものの逆に逃げられなくなってしまった婦警さん犯罪者のチンポで犯されて……といったプレイということでそら、前もご開帳～」
「はひぃッ……!?乳首つねるのらめぇ……！」
「オマンコがヒクついてますよこのまま奥までハメられてポルチオをぎゅうっと押されたらどうなっちゃうんでしょうね」
（そんなの……決まってる……頭の中が真っ白になって……）
「さあ……もうすぐ奥に届きますよ～」
もぅ…
あぁ…
はいって
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ガバッ
ギュウウ
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ

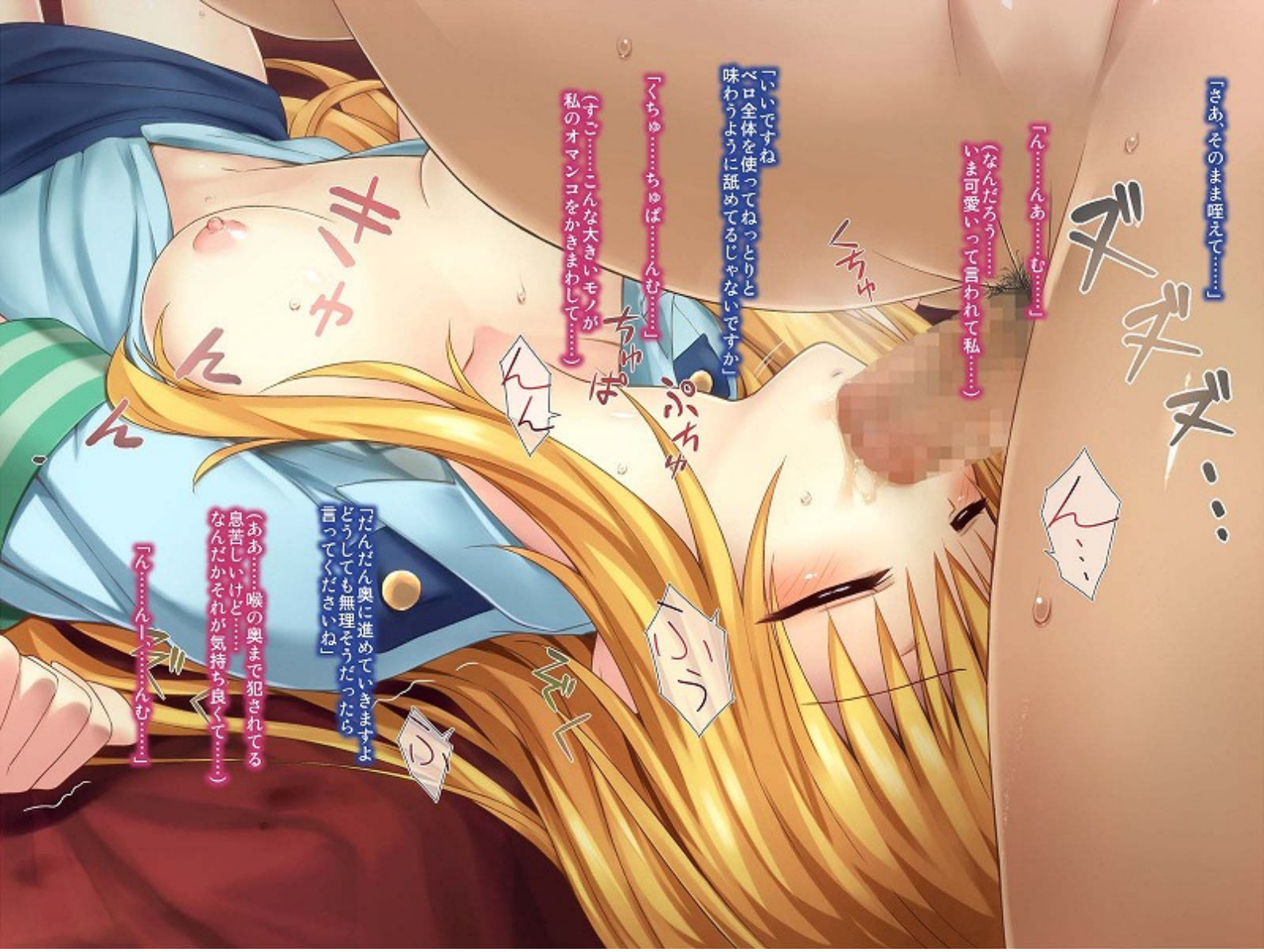
ズチュウ――
「か……は…あ――ッ！」
〈イってる……！
入れられただけなのに……！〉
「どうです、イキましたか？」
「は、はひ……
イ、イキましたぁ……」
「くくく、一度イクと
途端に素直になりますねぇ
でも、何か妙な感じですねぇ？」
「ふえ？」
ズニュウウウ

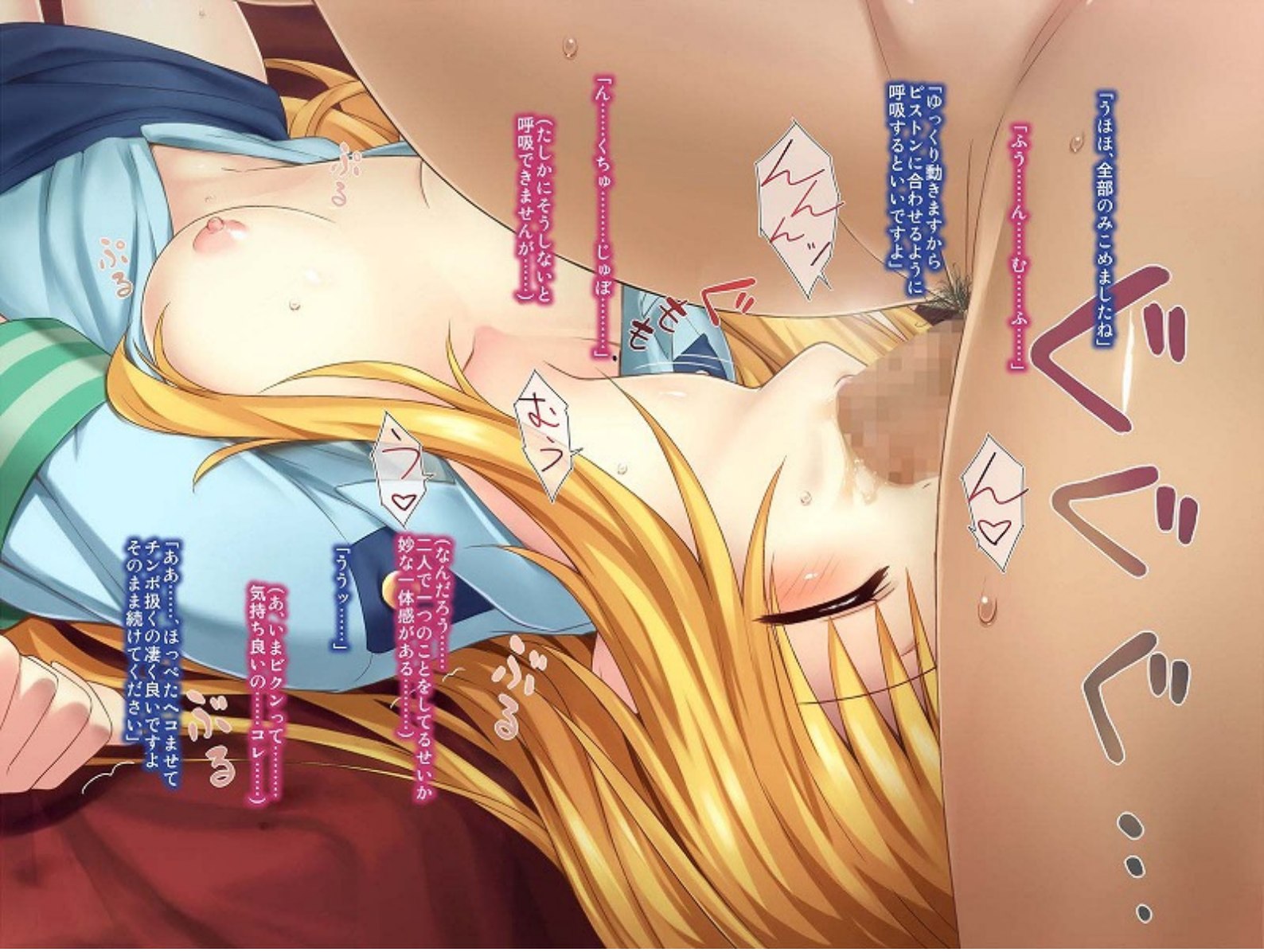
「ここ数日、精液を摂取して性感増幅の効果も薄れてきているはず」
（そ、そういえば……普段の身体のほてりはほとんど無くなってる）
「なのにわしとのセックスで気持ちよくなってるのは？」
「ついさっきなど挿入前から濡れ濡れでしたよねぇ」
「……」
（それは……つまり……性感増幅と関係なく私の身体が――）
「そ、そんなのまたアナタが何かしたんで――」
はっ
はぁ
ふぅ
ふぅ
ふぅ
ふぅ
とろ
とろ

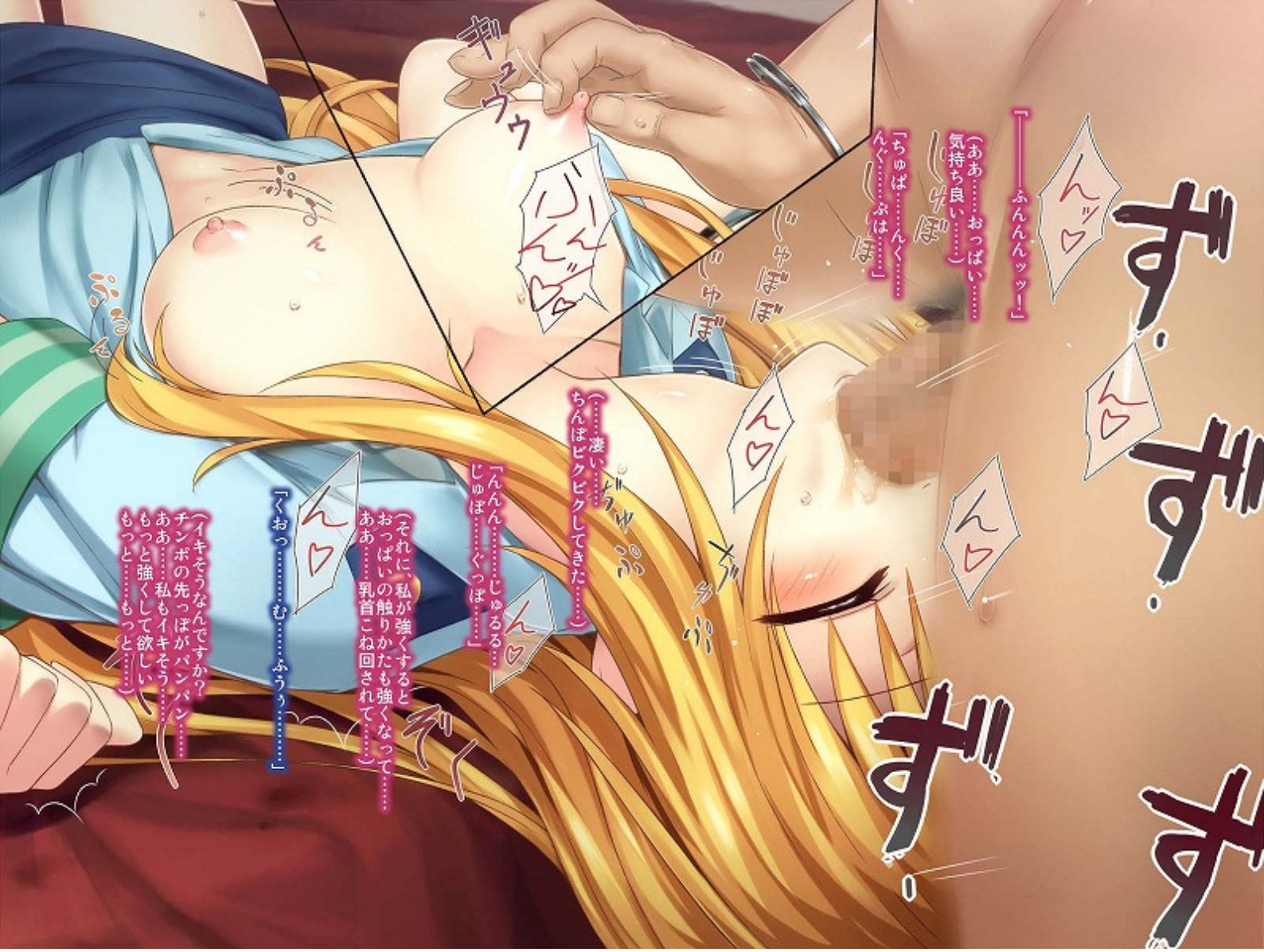
ビクン
ビクッ
ズルリュリュ――――
「――いひぃぃんんんッッ!?
そんら……
きゅ、急に出し入れしちゃ……！」
「ホントは分かってるんでしょ？
ヤミちゃんの身体は、マンコは
わじのチンポの味をしっかり
味わえるようになってるんですよ」
「ちがう……これは……」
「ならそれも
わじを興奮させるための
演技だというのですか？」
（ああ……これェ……
マンコの気持ちいいトコ
全部こすってる
太くて、硬くて、チンポ凄いぃ……）
「だめ……ひっ――
認めな……んいッ……！
これも……演技……だからぁ」
ガクン
ビクッ
ぱん
ぱん
ぱん
ぱん
ジュポッ
ジュポッ
ビチュッ
ビチュッ

「ふぅんはぁぁぁ――――ッッ！」
（あぁぁ……
また膣内に出されてる……
なんでこんなに気持ちイイの……）
「膣内射精に合わせて
こんなに締め付けて……」
（オマンコがイクときの
締め付けも変わってきてる……
奥へ奥へと引き込むような
えっちぃ動きしちゃってる）
「違う……わ、わたし……
そんなえっちく…な…い……」
「なかなか強情ですねぇ
……まあいいでしょう」
あ♡
は♡
は♡
ん♡
ぐ
ぐ
ぐ
は―
は―
は―
ぐ
ぐ
ぐ

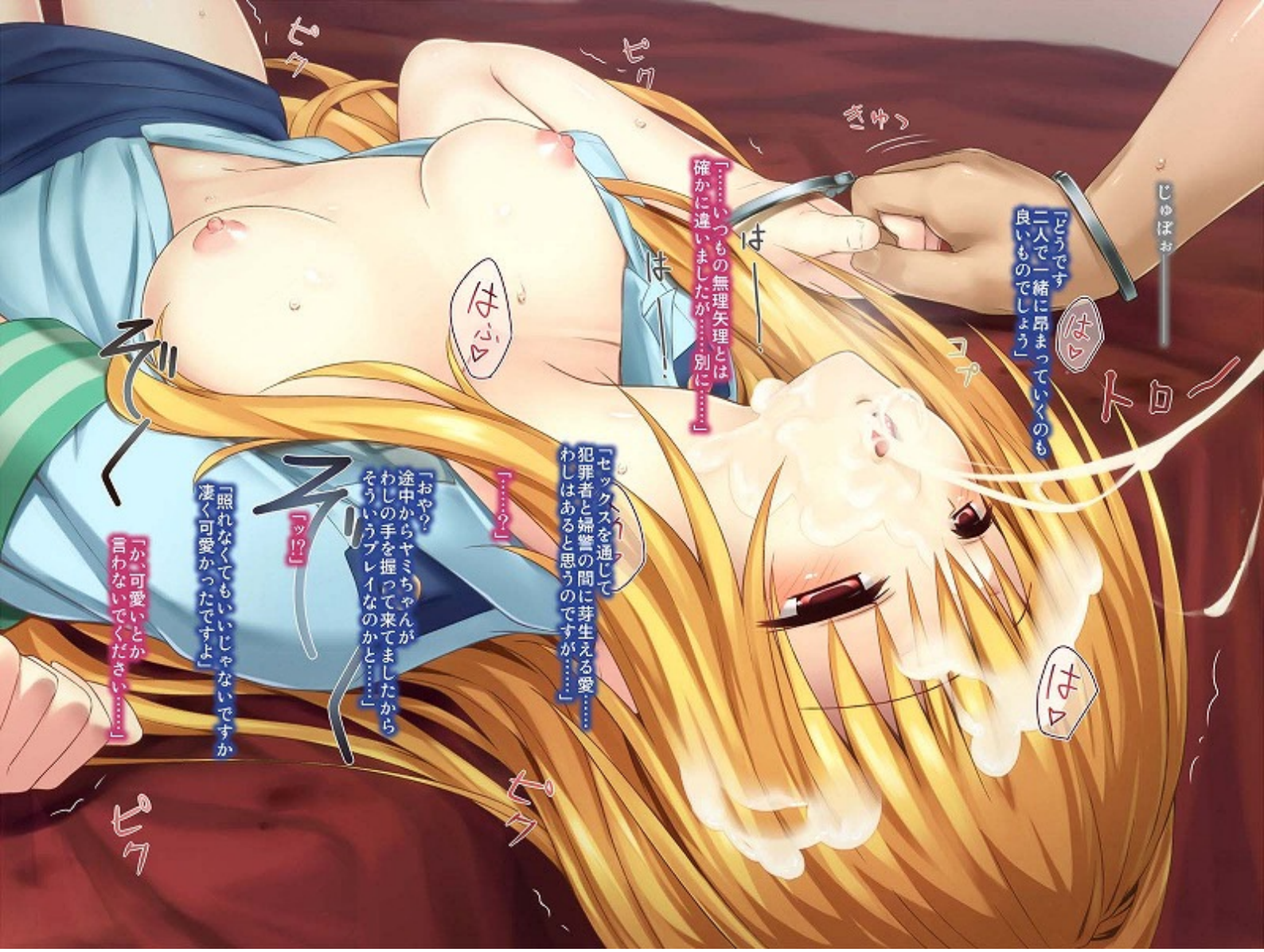
「今日はもう一つ仕込んであげますよ」
ぬう、
むぅ…
ピク
ピク
「イラマチオといってクチをマンコに見立ててピストンするセックスです」
「クチ……マンコ……？」
こ、こえ？
「そうです、女の子の身体は全部オマンコですからねぇ口や喉もどんどんチンポに馴染ませちゃいますよ」
（これ……さっきまで私の膣に入って……ザーメンと愛液でヌルヌルですごくやらしい臭い……）
「自然にクチが開いてきてますよ」
「――ッ！　これは、その……」
「ええ、分かっていますともわじの興奮を誘うための演技というのでしょう？そういう強情なところも可愛いですよ」
「!?　そんな……こと」
ピク
ぼ


「さあ、そのまま咥えて……」
「ん……んあ……む……」
（なんだろう……いま可愛いって言われて私……）
「いいですね ペロ全体を使ってねっとりと味わうように舐めてるじゃないですか」
「くちゅ……ちゅば……んむ……」
（すご……こんな大きいモノが私のオマンコをかきまわして……）
「だんだん奥に進めていきますよ どうしても無理そうだったら言ってくださいね」
（ああ……喉の奥まで犯されてる 息苦しいけど…… なんだかそれが気持ち良くて……）
「ん……んー……んむ……」
ズズズ…
ちゅぱ
ぷちゅ
ぐぐ


「うほほ、全部のみこめましたね」
「ふう……ん……む……ふ……」
「ゆっくり動きますからピストンに合わせるように呼吸するといいですよ」
ぐぐぐ…
「ん……くちゅ……じゅぼ……」
(たしかにそうしないと呼吸できませんが……)
ぶる
ぶる
ぶる
ぶる
(なんだろう……二人で一つのことをしてるせいか妙な一体感がある……)
「ううッ……」
(あ、いまビクンって……気持ち良いの……コレ……)
「ああ……ほっぺたへコませてチンポ扱くの凄く良いですよそのまま続けてください」


ずずず
ずずず
ずずず

ちゅうううッ
（ッ!?　ク、クリトリス吸われてるぅぅぅーッ!!）
「ンンンッッ――ッッ!!」
ビュルルル
ビュー
ビュー
ビュー
「ううッ……出る……ッ！ヤミちゃんも一緒にイッて！イ……クゥ……ッ！」
「ふうぅぅ――ンンッッッ！」
（はぁ……あ……すごい出てる……ザーメン直接胃に流れ込んで……ホントにクチがオマンコになったみたいで……）
「んぐッ！……んぐ……んん……ぐ……」
ビクン
ビクン
ビクン
チュウウウ
ブビッ
ビュッ


じゅぼぉ
「どうです 二人で一緒に昂まっていくのも良いものでしょう」
はぁ
トロ～
ぎゅっ
「……いつもの無理矢理とは確かに違いましたが……別に……」
は～！
は！
ピク
ピク
ピク
ピク
なぁ
「セックスを通じて犯罪者と婦警の間に芽生える愛……わしはあると思うのですが……」
「……？」
「おや？途中からヤミちゃんがわしの手を握って来てましたからそういうプレイなのかと……」
「ッ!?」
「照れなくてもいいじゃないですか凄く可愛かったですよ」
「か、可愛いとか言わないでください……」

7日目
「はぁ……はぁ……」
「もう目がトロ～ンってなっちゃってどんな感じですか」
「い、意地悪しないでください……お尻の中……コツコツって動くたびあちこち擦れて……く……ん……」
「お尻の中のナニが動いてるんでしょう」
「ア、アナルビーズ……です」
「なるほどこの発情ウサギさんはシッポを生やしてもらって喜んでるわけですな」
「ひんッ……！それ、引っ張っちゃ……！」
「どれどれ～」
はぁ
はぁ
はぁ
プル
プル
プル
プル
セク

「ポンって、ビーズが一つ出てきましたよ」
「は……く……んん……」
「引っ張るとお尻の穴が内側から盛り上がってえっちぃですねぇまるでビーズを逸すまいとしているようです」
「や……見ないでください……はずかしい……です……」
「そういう恥じらいは大事ですよ可愛いヤミちゃんがもっと可愛くみえますから」
「また……可愛いとか言って……」
「ん～？　でも可愛いって言われる度にお尻の穴が動くのがよく分かりますよホントはもっと言って欲しいんでしょ」
「わ、私は……ひんっ！」
チュポンッ
ピクンッ
ピクンッ
ピクンッ
プル
プル
ピクンッ
ピクンッ
ピクンッ

「はひ……ふあぁ……！
だめッ……！
舐めながら抜くのらめぇ……！」
「ん～、ぺろぺろ……
ヤミちゃんの身体に
汚いところなんて無いですから」
レロ
レロ
レロ
あっ♡
あっ♡
あっ♡
ブルブル
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ぐいぐい
「はぁ……く……ん……」
（これ……引っ張る力を
強めたり弱めたり……
ぎりぎりビーズが
抜けないようにしてる……？）
「もどかしさと期待が
ないまぜになった快感が
溜まっていくような感じでしょう」
（これで一気に
引き抜かれでもしたら……）
「そうして溜まった快感を一気に……
それっ！」
「ンヒィッ――ッ!!」
――ジュポポッ

ポンッ
ビクッ
ビクンッ
ビィ…ン
プヒュ
ビクッ
ビクンッ
ズ
ズ
ズ

「く……は、あ……ふ、太いの……入ってくる……」
「これでしばらく過ごせば今度はお尻でも私のチンポを楽しめるようになりますよ」
(ああ……次はお尻で……チンポずぼずぼされてしまうの……?)
「……以前のように無理矢理にはしないのですか?」
「誤解しているようですが……」
「え?……キャッ――」
「わしは最初からヤミちゃんに"恋愛"を教えてあげたいだけなんですよ」
はあ♡
あ♡
ビクン
ガク
ポタ
ぐむ
ビクンッ

「や……見ないで……」
（ああ……広げられるだけで
奥からヌルヌルが溢れてきてる……）
「もう言い訳は不要でしょう
身体はすっかりわしのことを
好きになってますよね」
「で、でも、こんなの……
私の知りたい恋愛とは……」
ぱく
「ヤミちゃんが
恋愛に興味をもったのは
小説がきっかけでしょう？」
「なら、わしが用意した小説にだって
こうしてえっちぃことから始まる
恋愛がたくさんあったはずですが」
「そ、それはそうですが……」
「迷いが見えますよ
心の底ではわしを
受け入れてるんじゃないのですか」

「ちょっ、まだ話の途中……んあ！」
「認めてしまえばいいじゃないですか」
「違う……私は無理矢理犯されて……」
「こんなに気持ち良くなってるのに？」
「関係……ありません……身体が元に戻ったら出てい……ん……あぁッ」
「……ふむでは勝負をしましょうか」
「しょ……勝負？」
「わしの恋愛観と相容れないなら身体が反応してしまっても心はそれに従わないと証明すればいいんです」
「そんなのどうやって……」
ピク
クチュ
チュク

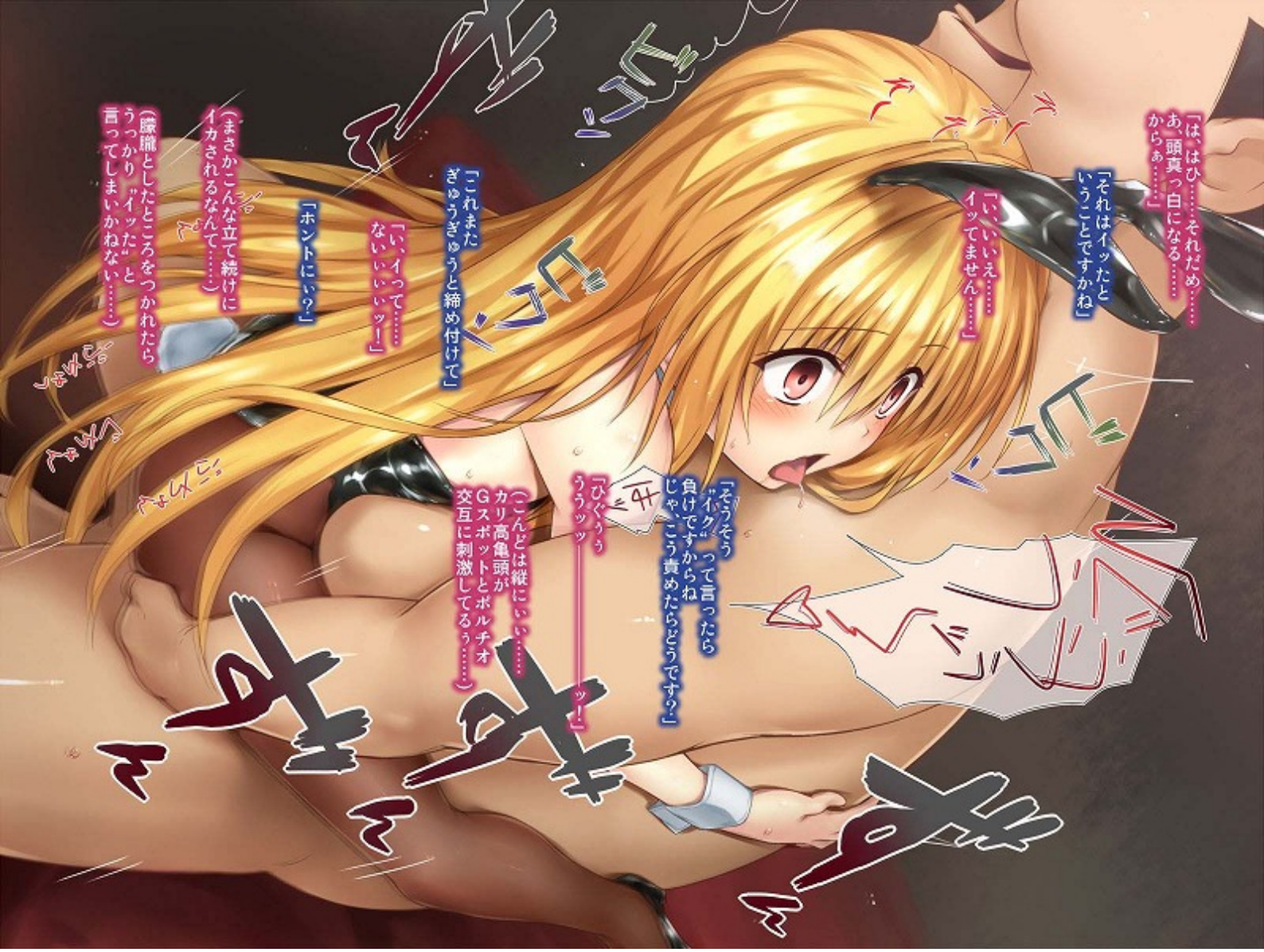
「今からこのチンポで攻められても
"イった"と言葉にしなければ
ヤミちゃんの勝ち
というのはどうです
制限時間はわしが射精するまで、で」
「む……
私がイクことは確定要素ですか」
「ヤミちゃんの身体が
そこまで開発されているというのは
双方が認めるところでしょう」
「でもだからこそ
それを否定できれば
迷いも無くなるというもの」
「……得るものが
釣り合ってないと思います」
「というと？」
「確かに私が勝てば
迷いは無くなるでしょう
でもそれはあなたの行動を
何ら制限するものではありません」
「逆に負けた場合
あなたの考えを認め
明日以降もこの関係を
継続するということでしょう？」

「聡いですなぁ
ではこの勝負は受けられない？」
「……」
（とのみちこれは
私にとってもハッキリ
させなければいけないこと
それなら……）
「私が勝った場合
以降ずっと、私に対して
えっちぃ行為をしないと
誓ってもらえるなら……
受けてもかまいません」
「いいでしょう
では、わしからも一つ」
？
「イッたかどうか
質問されたら必ず返答すること
最後まで無言でいられても
勝負の趣旨に反しますからねぇ」
「……分かりました」
「では早速
勝負開始ということで……」
ずぶぶぶ
ヒク
ヒク
ヒク
ヒク

ずぷぷぷぷ
「ふぐぅッ!?
ぐうぅぅぅ――!!」
(こ、これアナルプラグのせいでお尻がいっぱいになってるから……)
「ふっ……んんん……
つぐ……は…あッ……」
(すごいいい……!
いつもよりチンポが大きく感じる……!
壁を擦る刺激も強くて……
これじゃ……)
ビクッ
ビクビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
「やはりヤミちゃんの身体についてはわしの方がよく理解しているようですなぁ」
「どう感じているのか手に取るようにいや、チンポを通して分かりますよ」
「それが……くぅ……どうしたというのですそんなの勝負を……決する要因には……」
「じかしイク回数が増えれば……この辺でしょうか」
――ぐりゅう

「ふあ……
あぁぁぁぁっぁッ――――！」
「くくく、勢いよく
潮まで吹いちゃって
どうです、イッちゃいましたか？」
ブシャァァァ
ビクン
ビクン
ビクン

「あぁあ……ふ、深ッ……くっうう……」
（この体位だめぇ……チンポの先っぽが子宮に押しつけられて……弱いところにがっちりハマっちゃってる……）
「そんなにがっちり抱きついて情熱的ですねぇ」
「ちが……これは、ちょっとでも挿入を浅くしようと……」
「またすぐイかせてあげますからね小さいお尻をつかんでこんな風に回したら……」
「ひあッ！らめっ、回すのだめ……！」
（だめっチンポが奥から離れてくれないこんなの、すぐイククる……キちゃう……）
「ひあああ――ッッ！」


「は、はひ……それだめ……
あ、頭真っ白になる……
からぁ……」
「それはイッたと
いうことですかね」
「い、いいえ……
イッてません……」
「そうそう
"イク"って言ったら
負けですからね
じゃ、こう責めたらどうです？」
「ひぐぅう
ううッッ
ッ！」
（こんどは縦にいい……
カリ高亀頭が
Gスポットとポルチオ
交互に刺激してるぅ……）
「これまた
ぎゅうぎゅうと締め付けて」
「い、イって……
ないいいッ！」
「ホントにぃ？」
（まさかこんな立て続けに
イカされるなんて……）
（朦朧としたところをつかれたら
うっかり"イッた"と
言ってしまいかねない……）

(そうだ……この人の口を手で塞いで喋れなくしてしまえば……)
ズリュ……ズチュ
「ふあ、はッ……くうううッ――ッ!」
(だめぇ……しがみつく手を離したらチンポで串刺しにされちゃう……これじゃイキっぱなしになるぅ……!)
「もしかしてヤミちゃんわしの口を手で塞こうとしてました?」
「く……」
「ルール違反などと言いませんが必死すぎませんかぁお、怖い怖い」
(くやしい……こんな目の前にあるのに他に何か……この口を塞ぐ方法……)

（だめ、またイッちゃうッ――ッ！）
「うむぐッ……」
――ぎゅう……
（あぁ……とっさにシちゃったけどこれ……これえ……）
「ぷはっ……なるほどそうやって口を塞いできましたか
でも、くくく……ヤミちゃんこれファーストキスですよねぇ？」
「だ、だったらなんだっていうんです！」
「ヤミちゃんから初めてを捧げてくれるなんて嬉しいじゃないですか」
「別にアナタを喜ばせるためでは……ひあッ！
だめ、動かないでぇ……」

「んん……クチュ……ちゅば……はぁ」
（ああ……自然に舌が入っちゃう……なにこれぇ……キスってこんな気持ちいいの……？）
「こういう体位のことを〝だいしゅきホールド〟なんて言ったりしますがもう完全に恋人同士のラブラブセックスですねぇ」
「だ、だれがあなたなんかと」
「強がるヤミちゃんも可愛いですよ」
「――ッ！」
「うお、今凄く締まりましたよ下の口で応えてくるとは可愛いなぁ、ヤミちゃんは可愛いなぁ」
「う、うるさい！」
（うそ、なんでこんなので……可愛いって言われてるだけなのにオマンコが勝手に反応しちゃう）
ハァハァ
ハァハァ
ハァハァ
チュパ
チュパ
ジュパ

ピリチュ
ピリチュ
ピリチュ
ピリチュ
「ん……あ……もっと……クチュ……」
（どうして……キス……こんなに気持ち良いの……胸の奥から気持ちよさが広がって……）
（この人に喋らせないためにやってるハズなのに……ずっとシていたくなっちゃう）
「あ……んん……だめ、またッ……！ンンンッ――はぁ……ン……クチュ……」
（こんなの……イクたびに舌を絡めて……ホントに恋人同士みたい……）
「ンン……クチュ……チュパ……」
チュッ
ジュルル
ギュッ
ビクン

「ぷはっ……」
(だめっ……クチ離しちゃイッてないって答えなくちゃ……)
「キスは気持ち良いですか?」
「……はへ?」
(イッたのか聞いてこない……?なら……否定する必要は……)
「……は……い……」
「ヤミちゃんは気持ちイイの好きですもんんねぇ」
「はふ……ちゅば……好き……んんん」
「じゃあキスでイっちゃいましたか?」
(これは……答えちゃ……だめ……)
「イッて……ない……んくちゅ……」
ピク
ピク
ピク

「深く繋がって奥をグリグリすると
子宮口がコリコリして気持ちいいですよね」
（これは……答えても……）
「私も……ポルチオ刺激されると
腰が溶けるみたいに気持ち良くなって……」
「絞るように胸を揉まれると
さきっぽが充血して感じるでしょう？」
（これも……答えて……）
「はい……
乳輪まで勃起しちゃってます」
トクン
トクン
トクン
トクン
「舌を絡め合っていると
互いに気持ち良くなろうと
高揚してきて気持ちイイですよね」
「は……い……
んん……気持ち良い……
キス……んんちゅ……
凄く興奮して好きです……」

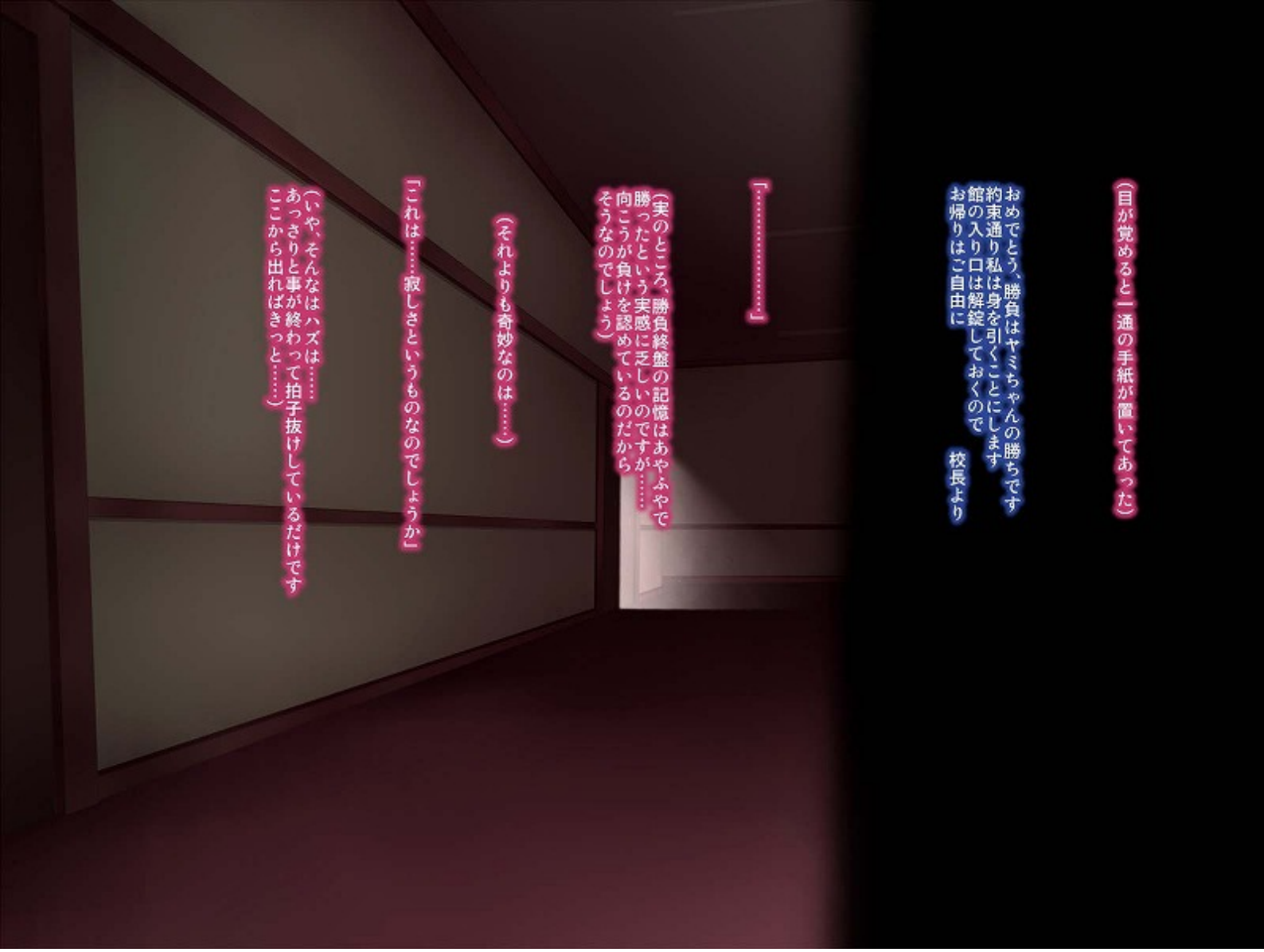
「可愛いって言う度にオマンコ締めてくるヤミちゃんが大好きなんですよ」
「私も……可愛いって言われる度に胸の奥が気持ち良くなって……言ってくれるあなたが……」
「わしが？」
「好き……♥」
（あれ？私なに言って……でも〝イッた〟って言ってないから大丈夫の……はず……）
「ひゃっ……！膣内でチンポ大きくなったぁ……」
「……わしとしたことが興奮して抑えが効かなくなってきましたヤミちゃんは激しくされるの好きですか？」
「好きぃ……激しくされて子宮にチンポの先がめりこむくらいがイイぃ」
「では激しくいきますよ」
好き♥
あ♥
ふぁ♥
ギュウ
ん
ん
ん
ん
ちゅぱ
プチュ
ぷふ
はむぅ
ギュウ
ギュウ♥
ギュウ♥
ギュウ♥

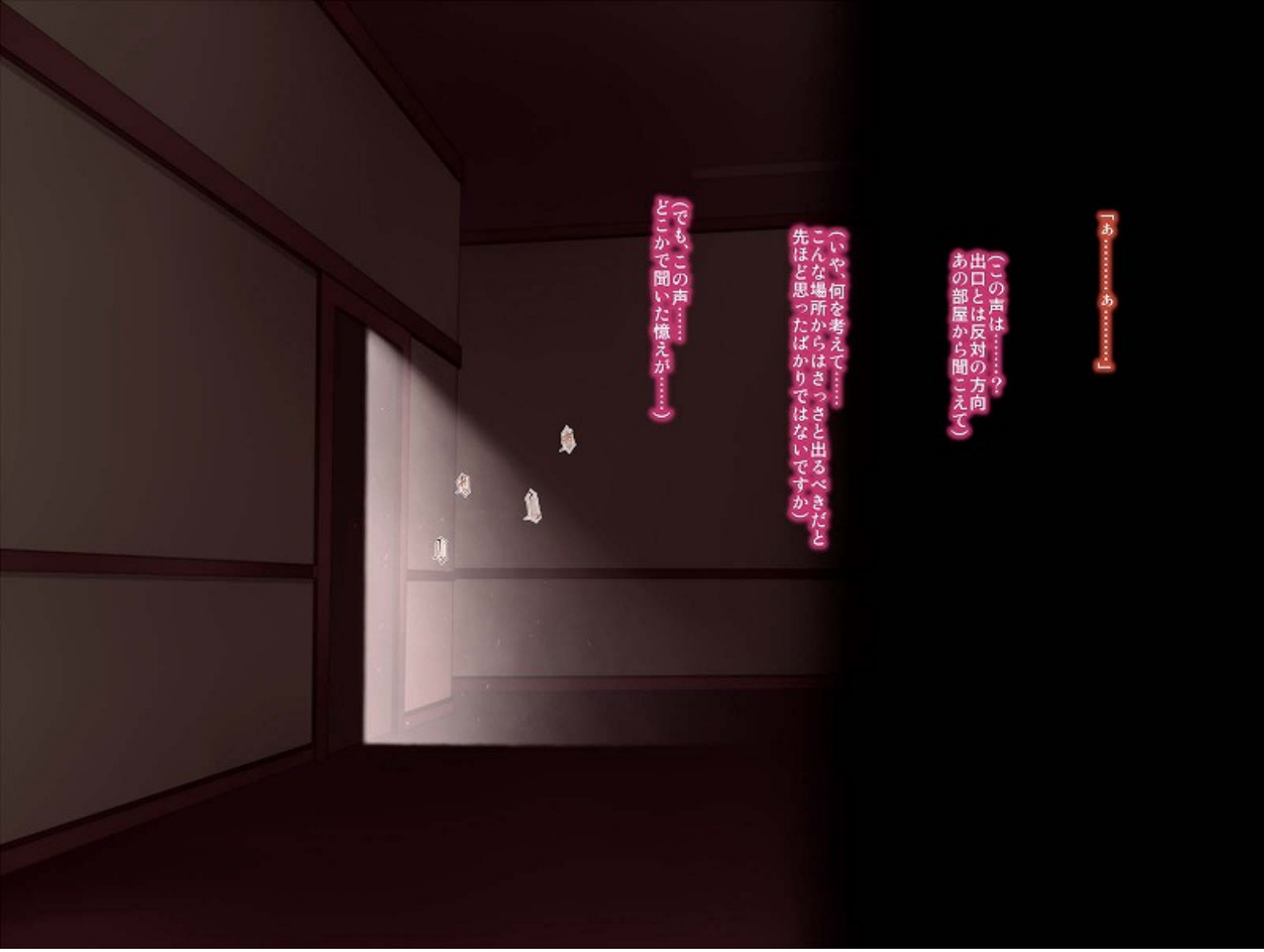
「ふぅうおッおおおッ——ッ！
は、はげひっ……
奥にドチュッってぇッ……！」
「ヤミちゃんは軽いから
駅弁するのも楽ですねぇ」
「しゅごっ……えきべん
しゅごいいッ……！」
（私の全部、この人のものになってる
振り子みたいに揺られて
凄い勢いでオチンポくるぅ……）
「んん……ちゅぱ……
ジュプ……んむむ……」
（ああ……キスもイイ
絡み合って唾液を交換して……
舌が溶けちゃいそう……）
ドチュン
ビクン
ビクッ
ビクビク
ビクン
ビクッ
ビクビク
ビクン
ビクッ
ビクビク

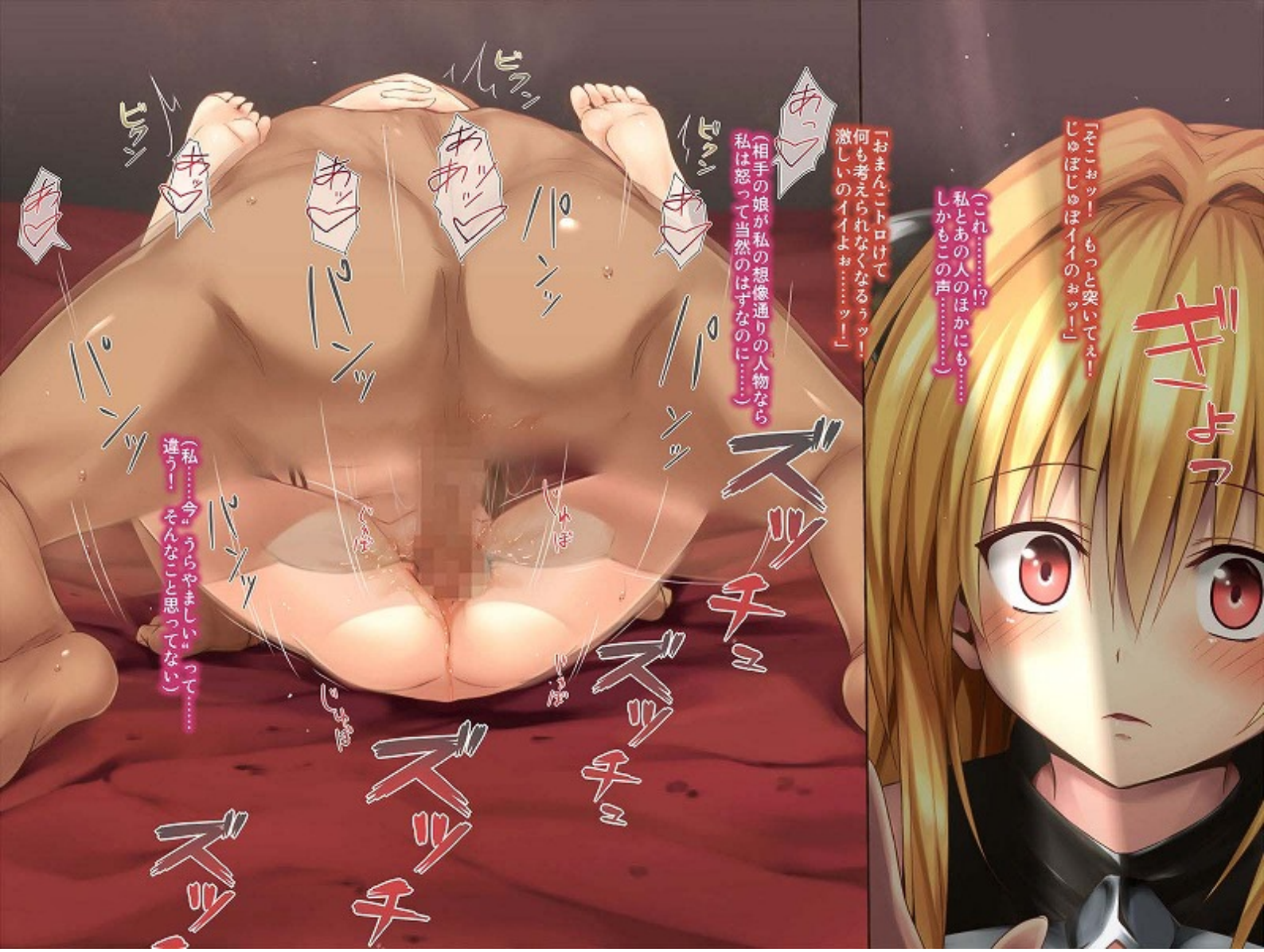
「そろそろイキそうですよ
どこに出してほしいですか？
いや、どこに出されるのが
一番気持ちイイですか？」
「な、ナカぁッ……！
膣内にどぶどぶ
出されるのがイイのぉッ！」
「じゃあ出してあげますよ
子宮満タンにして
重さが分かるくらいに
たっぷりと」
「キてぇッ！
出してッッ!!
いっぱいにしてぇッ!!!」
「いくおおおおおッ……！」
「私もイッ……」
ドチュッ
ドチュッ
ズチュ

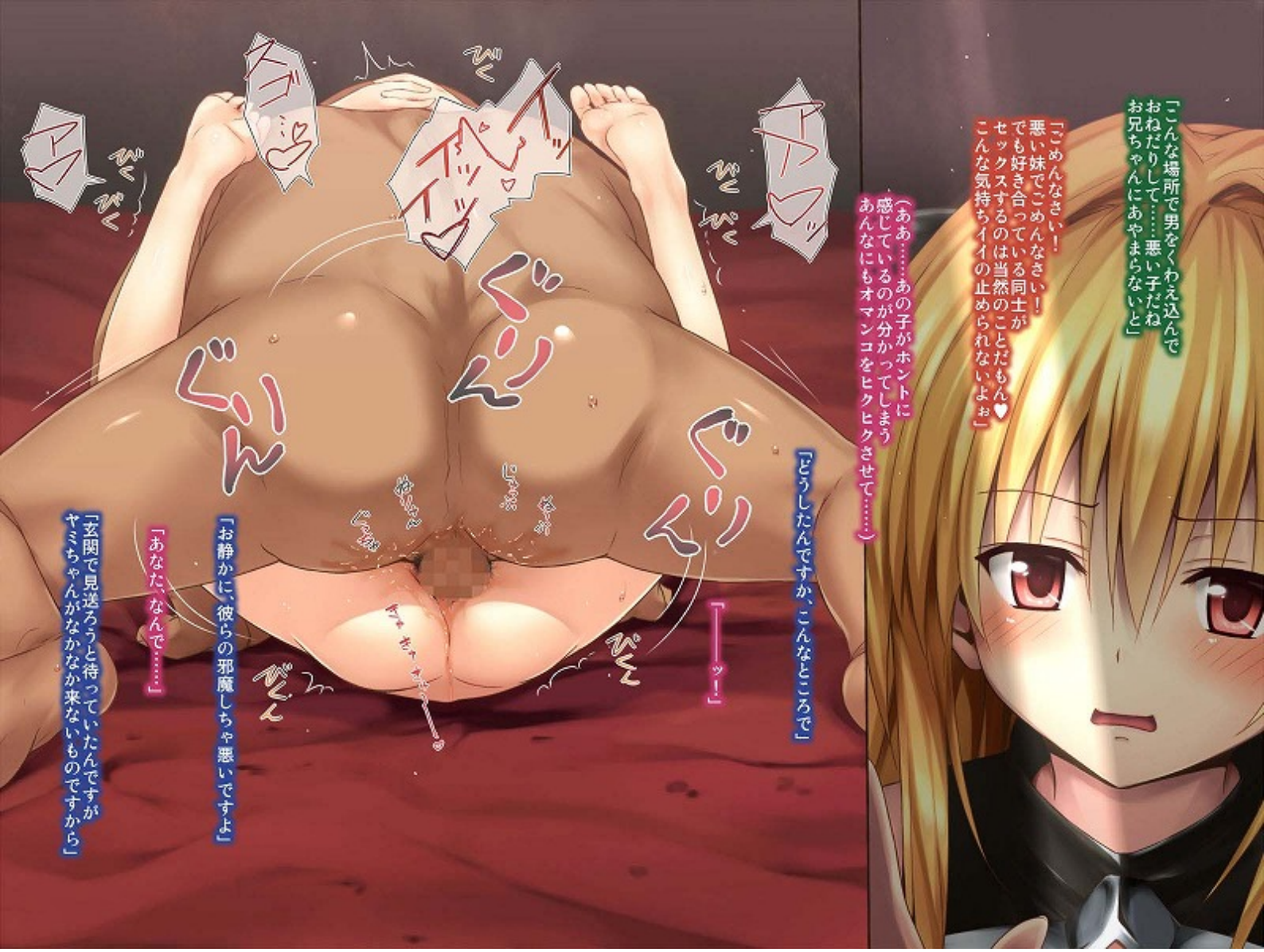
ビュルルルル
「ンンンッ――――ッ♥！」
（キスされながら膣内出しいいい……
子宮が一杯になるの分かるぅ
染められちゃう
子宮も私もこの人色に染められちゃう）

「……ぷはっ
いやー出した出した
しかし残念ながら
勝負はわしの負けですねぇ
ヤミちゃんが“イク”と言う前に
わしの方が果ててしまいましたから」
「は……あひ……
は……あ……」
「と言っても分かりませんか
まあ聞きたい言葉も聞けましたし
楽しみに明日を待つとしましょうかね……」
は♡
あ♡
ピク
トロ〜

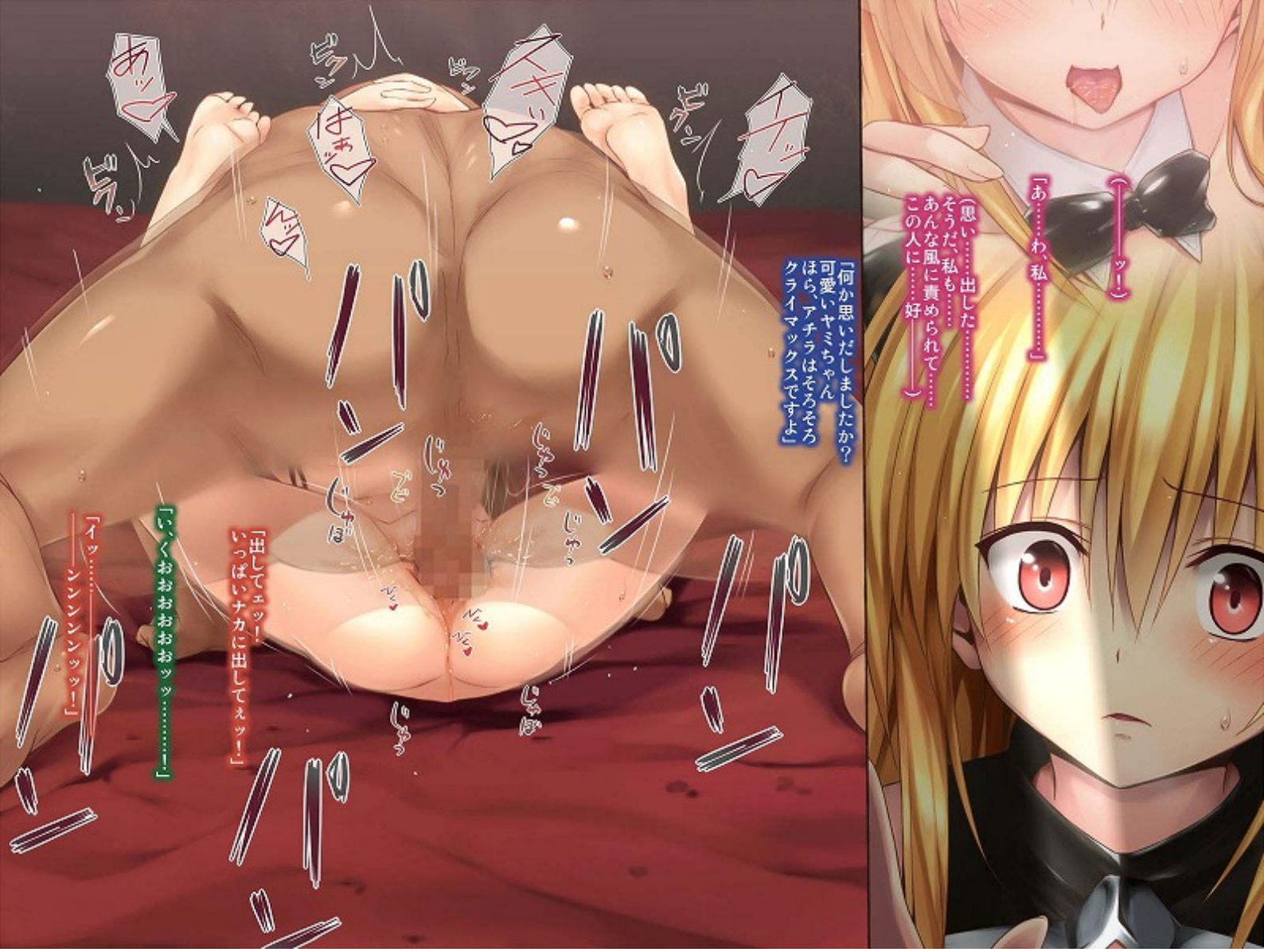

（目が覚めると一通の手紙が置いてあった）
おめでとう、勝負はヤミちゃんの勝ちです
約束通り私は身を引くことにします
館の入り口は解錠しておくので
お帰りはご自由に
校長より
「……」
（実のところ、勝負終盤の記憶はあやふやで
勝ったという実感に乏しいのですが……
向こうが負けを認めているのだから
そうなのでしょう）
（それよりも奇妙なのは……）
「これは……寂しさというものなのでしょうか」
（いや、そんなはハズは……
あっさりと事が終わって拍子抜けしているだけです
ここから出ればきっと……）


「あ……あ……」
（この声は……？
出口とは反対の方向
あの部屋から聞こえて）
（いや、何を考えて……
こんな場所からはさっさと出るべきだと
先ほど思ったばかりではないですか）
（でも、この声……
どこかで聞いた憶えが……）


ギシッ
「そこぉッ！　もっと突いてぇ！　じゅぼじゅぼイイのぉッ！」
（これ……!?　私とあの人のほかにも……しかもこの声……）
「おまんこトロけて何も考えられなくなるぅッ！　激しいのイイよぉ……ッ！」
（相手の娘が私の想像通りの人物なら私は怒って当然のはずなのに……）
あっ
ビクッ
パンッ
ズッチュ
（私……今“うらやましい”って……違う！　そんなこと思ってない）


「こんな場所で男をくわえ込んでおねだりして……悪い子だねお兄ちゃんにあやまらないと」
「ごめんなさい！悪い妹でごめんなさい！でも好き合っている同士がセックスするのは当然のことだもん♥こんな気持ちイイの止められないよぉ」
（ああ……あの子がホントに感じているのが分かってしまうあんなにもオマンコをヒクヒクさせて……）
「どうしたんですか、こんなところで」
「――ッ！」
「お静かに、彼らの邪魔しちゃ悪いですよ」
「あなた、なんで……」
「玄関で見送ろうと待っていたんですがヤミちゃんがなかなか来ないものですから」
ぐりん
ぐりん
ぐりん

「しかし仲むつまじいラブラブセックスですねぇあの愛液のアーチ……」
「あぁ……凄い……」
（まるで腰が離れるのを惜しむように何本も……昨日までの私もあんな感じだったのでしょうか）
「さっきからこっちをチラチラ見ていますがどうかしましたか？」
「い、いえ……なんでも……」
（でも……なんだろう……目の前の二人を見ていると何か思い出しそうな……）
ぬぬぬぬ…
ネバ～
ぎゅう～
んっ♡
んんっ♡
あんっ♡
はっ♡
「気持ちいいの好きぃ……！」
「気持ちいいの好きぃ……！可愛いっていってくれるあなたのことが……」


「何か思いだしましたか？
可愛いヤミちゃん
ほら、アチラはそろそろ
クライマックスですよ」
「出してェッ！
いっぱいナカに出してぇッ！」
「いくおおおおおッ……」
「イッ……
ンンンンッッ！」
（――ッ！）
「あ……わ、私……」
（思い……出した……
そうだ、私も……
あんな風に責められて……
この人に……好――）

「あーあー、あんなに出して
妊娠しちゃったら
どうするんでしょうねぇ」
「あ、あの時のアナタも
イクと言いかけた
私のクチをキスで塞いで……
最初から勝負など
どうでもよかったのですね」
「そういうわけではありませんが
わしはヤミちゃんの気持ちが
聞きたかったのでねぇ」
「そしてそれを
こうして目の前で他の実例と
あわせて追体験させて……」
「どうです？」
やっぱりえっちぃことから
人を好きになることも
あったでしょう？」
「わ、私は……」
「無意識に発した言葉には
ある種の本心が宿るといいますよ
あの時のように素直になったらどうですか
ほら、あなたのお友達もあんなに彼と
愛し合ってますよ」

「やぁん……まだ抜いちゃだめぇ……♥」
「ああ……美柑……あなたまで……」
「あ……ヤミさんだぁ……どうしたんですかそんなところで
こっちへきて
一緒に気持ちよくなりましょうよ」
「彼女もああいってますよ
ヤミちゃんもさっきから身体が
ウズいてしかたないんでしょう？」
「さあ、もっと可愛いあなたを
わしに見せてください」
「ああ、私……私……」
ぶるる
ギィ・ィ
はぁ
はぁ
はぁ
ふぅ
ふぅ
ふぅ
ふぅ
トプ…

「そう……なんです
オマンコにチンポが
ずぼずぼ入っているのを見ていただけで……」
「腰と腰がぶつかりあう乾いた音を聞いただけで……」
「汗とよだれと愛液と精液がまじりあう
すえた臭いをかいただけで……」
「それだけで
こんなに濡れちゃうくらいウズウズして……
同じことをしてほしいって……」
「あなたの言うとおりでした」
「私――――」
じゅん

「えっちぃこと……好きになっちゃいました♥」
はー
はー
はー
トロ…

？日目――
「ひゅごいよぉッ……お尻きもひイイよぉ……ッ！」
「あちらもお盛んですねぇ」
「す、すみません……興奮して上手く入れられなくて……」
「いえいえ、あやまることはありませんヤミちゃんが後ろの処女を自ら捧げてくれるというのですからいくらでも待ちますよ」
「はい……頑張ります……う……んん……大っきいのが……はぐぅ……入って……」
ズリュンッ――
「うほほ、アナルはこの入り口の締め付けがたまりませんねぇ、でもそこを過ぎれば……」

「くひぃィッ――――ッ！
は、入っちゃった……
奥まで……一気に……」
「そうそう、一番太い
カリの部分さえ通れば
こんな風に一気に、ね」
ビクン
ぞく
ぞく
おっ
「はぁ……肉の塊でお尻の穴……
一杯になってる……」
「どうです？
初めての場所にチンポを受け入れて」
「よく分かりませんが
いつも気持ち良くなる場所が
別の場所から
刺激されているような……」
ビクン
ぬるるるっ
「膣が裏側から刺激されているのですよ
でもそれはオマンコを基準にした感じ方
アナルの良さは抜くときが本番です」
「そ、そうなんですか……？」
「ゆっくりと腰を上げてみてください」

「ひぁっッ……!?
す、すご……出てくぅ……
んおおぉ……オチンポがぁ……」
「排泄時の快感がずっと続くような快感でしょう」
「めくれちゃうぅ……裏返っちゃう……お尻とけちゃう……！」
「一度入れて出しただけでもうトロトロですね」
「だ、だって……アナルプラグなどで慣らしていましたから……最初から気持ちよくてもイイ……イイ……」
「じっくりほぐした甲斐がありましたねさあ、後は自由に動いていいですよ」
「はぁい……んん……ん…ふぁ……あぁ……また奥まで入ったぁ……」
ビク
ビク
ビク
ビク
ビク
お〜ッ
おッ
は〜い♡
う〜ん♡
ぬ

「ときにその格好は……結城くんとデートしたときトランスで作った服と似ていますが……」
「はい……あなた好みにアレンジしてみましたどうですか……？」
「とても似合っていますよ世界一可愛いです」
「そ、そう……ですか……（ボッ）」
「トランスをわしのために使ってくれたのもうれしいですね……ということは性感増幅の効果はすっかり無くなっているのですね」
「ええ、でも今の方がずっと気持ちイイんです身体の隅々まで意識できるというか……んッ♥」
「むほっ……急に締め付けて」
「こんなことも出来るんですよ……？♥」
「た、たまりませんねぇ」
はぁ♡
はぁ♡
んッ♡
はぁ♡
キュうっ♥
キュぅ♥

「はあ……だんだん……勝手が分かって……きまひた……」
「良い感じにトロけできましたね そろそろわしも動きますよ……それっ」
「ひあぁぁ……んッ！ ひゅご……動き……合わせるらけで……こんら」
「チンポが抜けかける くらいまで引いて……」
「ふあぁぁぁ～～～ッ！」
「ヤミちゃんが 腰を降ろすタイミングで……」
「ふぉおおううう……んんッ！」
「さっきから小さくイってますねぇ そのたび入り口がキュッと 締め付けてきてますよ」
「イッてましゅう……ッ！ 小さいアクメ れ、連続でキてましゅう……ッ！」

「も、身体支えられなふてぇ……なのに腰が……勝手に……跳ねてぇ……」
「大きいのがキそうなんですねいいですよ中に出してあげますから初アナルの初中出しでマジイキ決めちゃいなさい」
ジュボッ――ズチュッ――グチュッ
「うほおおお

「は、はひ……でへるぅ……おひりの中にザーメン……いっぱぁい……」
「ふー これでヤミちゃんの初めては全てわしが頂いたことになりますねえ」
「ふぁい……♥」
ビュー ビュー
ドクドク
ビュルルル
「二段落着きましたかな」
「おお、そちらはどうされました」
「美柑ちゃんは、ホレお尻でイキすぎて休んでいるのでね」
「ははあ……そういうことですかしょうがありませんなぁ前はわし専用ですが後ろなら今しがた開通しましたからそちらなら……」

「妬けますなぁ
まあ私も美柑ちゃんの前を
使わせるつもりは
ありませんけどね」
「ひゃ……な、なんれすか……」
「見てのとおり
ヤミちゃんの前と後ろの穴を
同時に気持ち良くして
あげるんですよ」
「や、まっへ……私まら……
イったばかりれ……」
あ…♡
あぁ♡
ひゃって、
ブッ
ブッ
「心配いりませんよ
後ろの彼もこういうことには
慣れていますから」
「ええ、存分に
気持ちよくなってください」
「そ、そういう話れは……」

「おほおおおおおッッ――――ッッ！」
「さすがにキツい……」
「ふおお……ヤミちゃんは良いアヌスしてますなぁ入り口はキュっと締まって奥は絡みつくようで……」
「そうでしょうそうでしょうオマンコの方も極上なんですよ」
「どうです、ヤミちゃんアナルプラグを入れながら前に入れた時とはまた違うでしょう？」
「は、はひ……な、なまチンポ……ずっと奥まれ……みっちり、来てまふ……うう」
「でしょうねえわしも彼も大きい方ですからねこれで交互に出し入れしたらどうなると思います？」
「は……あは……は……」
ビクッ
ビクン
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「ふひいいいいいッ――――ッ！
チンポ……
チンポしゅごいいッ……ッ！
前も後ろもズリズリしへぅ……
ヒダヒダ全部こすってるのぉッ……ッ！」
「くく……
こんなに喜んでもらえるとは」
「我々も息を合わせる
甲斐があるというものです」
「はひ……ひあああッ！
奥がずっと……
ううん……ぜんぶ……
ぜんぶきもひイイいいッッ……！」
「前が抜かれたと思ったら
後ろから奥を突かれ……
後ろが抜かれたと思ったら
今度は前から奥を……」
「奥への刺激が連続してくるのに
両穴の中腹もゴリゴリと
擦られるんですからねぇ」
「こんなの……らめッ……！
イキっぱなひになる……ッ！
戻ってこれなくなるぅッ……！」
ビクン
ビクビク
ビクン
ビクン
ビクン

「少しタイミングをズラせば……」
「ひあぁぁあぁッ――ッ！
同時に奥突くのらめぇッ――ッ！」
「ヤミちゃん
白目むいちゃってるじゃないですか
酷いなぁ（笑）」
「いやいや、彼女はこれが
わしなりの愛情表現だと
理解してくれていますから
ね、もっとしてほしいですよね？」
「そうらのぉ……♥
私のこと好きだからぁ……！
気持ひイイのが好きな私も
もっとこの人に恋しちゃうのぉッ……！」
「これは……
ますますもって妬けますなぁ
このままケツ穴を攻めて
良くしてあげれば
私のことも好きに
なってくれますかねぇ」
「ぬ、聞き捨てなりませんな
あくまで彼女を
最も気持ち良くできるのは
このわしですよ」

「や……ちょ……ヒアアアアッ……！
は、はげひ……！
そんなにひたらオマンコとケツマンコ繋がっひゃう！」
「ふんッ……！ うんッ……！
ケツ穴の方が気持ちイイでしょう？」
「しゅ、しゅごいですぅぅッ！
しょんなカリ高チンポで削られたらケツ穴のヒダヒダ無くなっひゃうぅぅ！」
「いやいや、ハメ慣れたオマンコの方が気持ち良いですよね」
「オマンコ穴
完全にチンポ型になってるのぉ！
入り口から奥までぴっちりれぇ
このチンポ以外考えられないのぉ！」
「らめ、そんらの、競争ひちゃらめぇッ！
中の気持ち良いところゴツゴツ……ジュポジュポッてぇ
もうらめ、とぶ……二穴アクメくるくるキチャウッ」
ずぼずぼ
じゃぼじゃぼ
ぐちゅぐちゅ

「イグ！♥イグッ!!♥
イングぅうッ――ッッ!!!♥」
「くおお、締まる……！」
「これは、たまらんッ！」
「あひぃいいッ♥
ヌルヌルザーメンでへるぅッ……ッ！
きもひイイッ……！
イクッ……ザーメンで
叩かれてまたイっひゃうぅ
♥ッ!!」

「しゅご……えっちぃことしゅごい……あふれてくるセーエキで……まら……いっひゃう……」
「はぁ……はぁ……」
(ここまで堕ちれば もう監禁しておく必要もないでしょう)
「はぁ……えっちぃの……もっとぉ」
(誰かが不審に思って ヤミちゃんを探し始める前に……)
「ヤミちゃん 他の場所でえっちぃことをするのに 興味はありませんか?」
「ほかの……ばしょ?」

「わしは"長期の出張"のせいで校長としての雑務が溜まっているでしょうしヤミちゃんも欠席していた間の勉強が遅れているでしょう」
「学校……ですか」
「遅れた分の勉強をわしがみてあげますよ」
「そんなことを言って……えっちぃことも教える気なのでしょう?」
「うほほ、学校ならいつでもペロペロし放題ですからねぇ」
「はい……またココにいっぱい注いでくださいね♥」
ぶるぶる
ふる
ぷるぷる
ふる
ぷるぷる
ふる
ぷるぷ